

195
34
111

古史傳
二十七

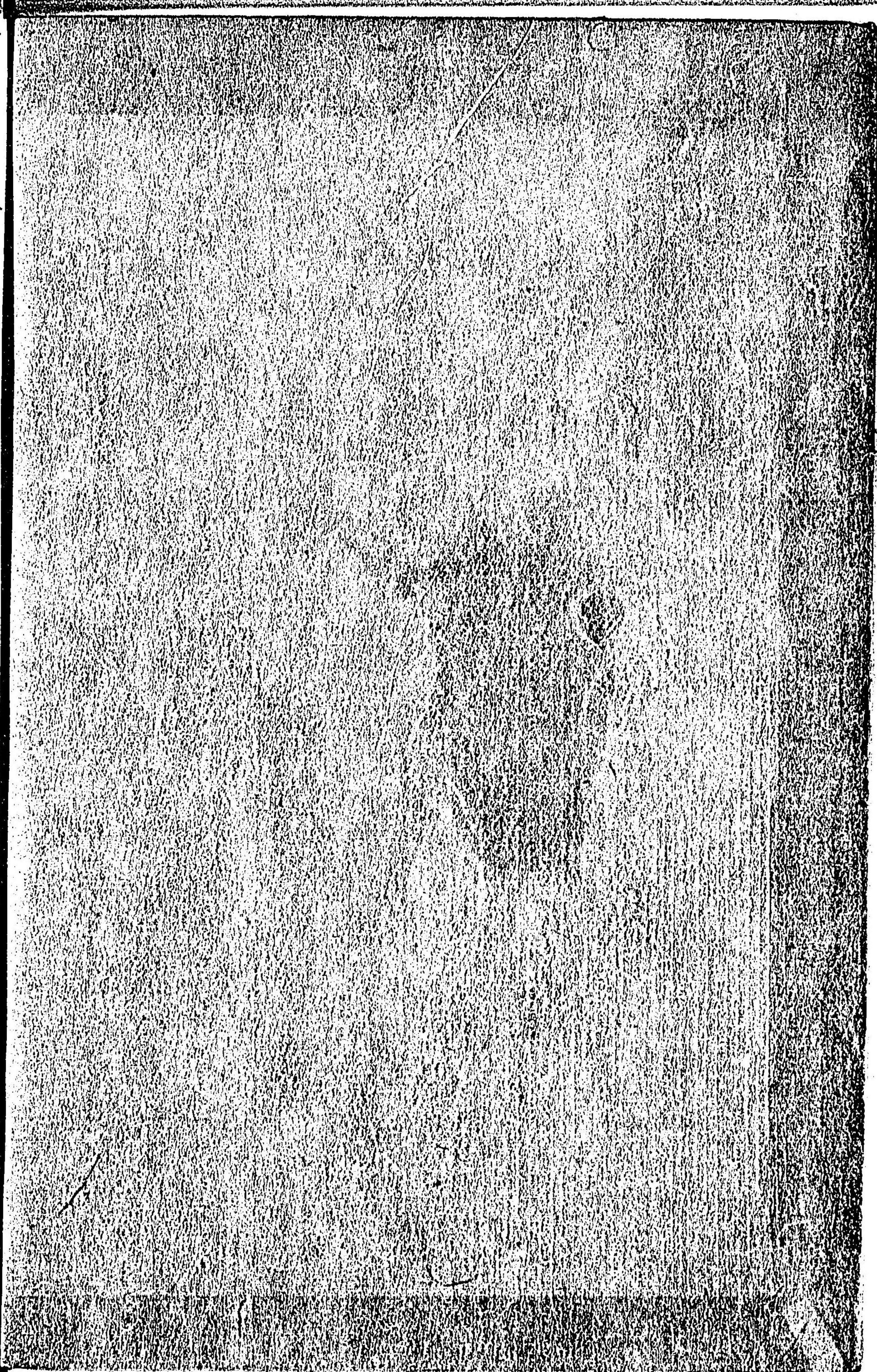
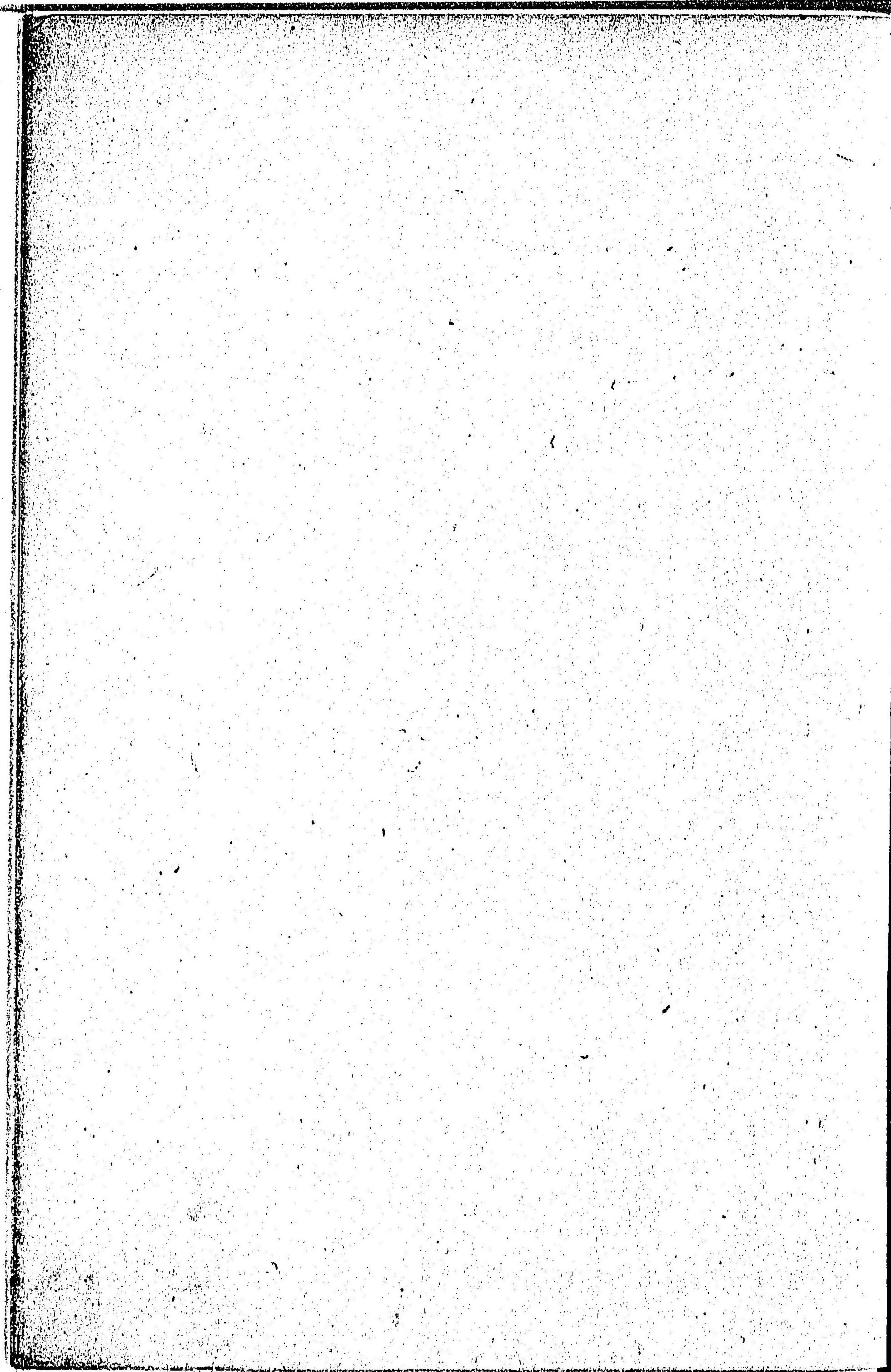
195
27
111

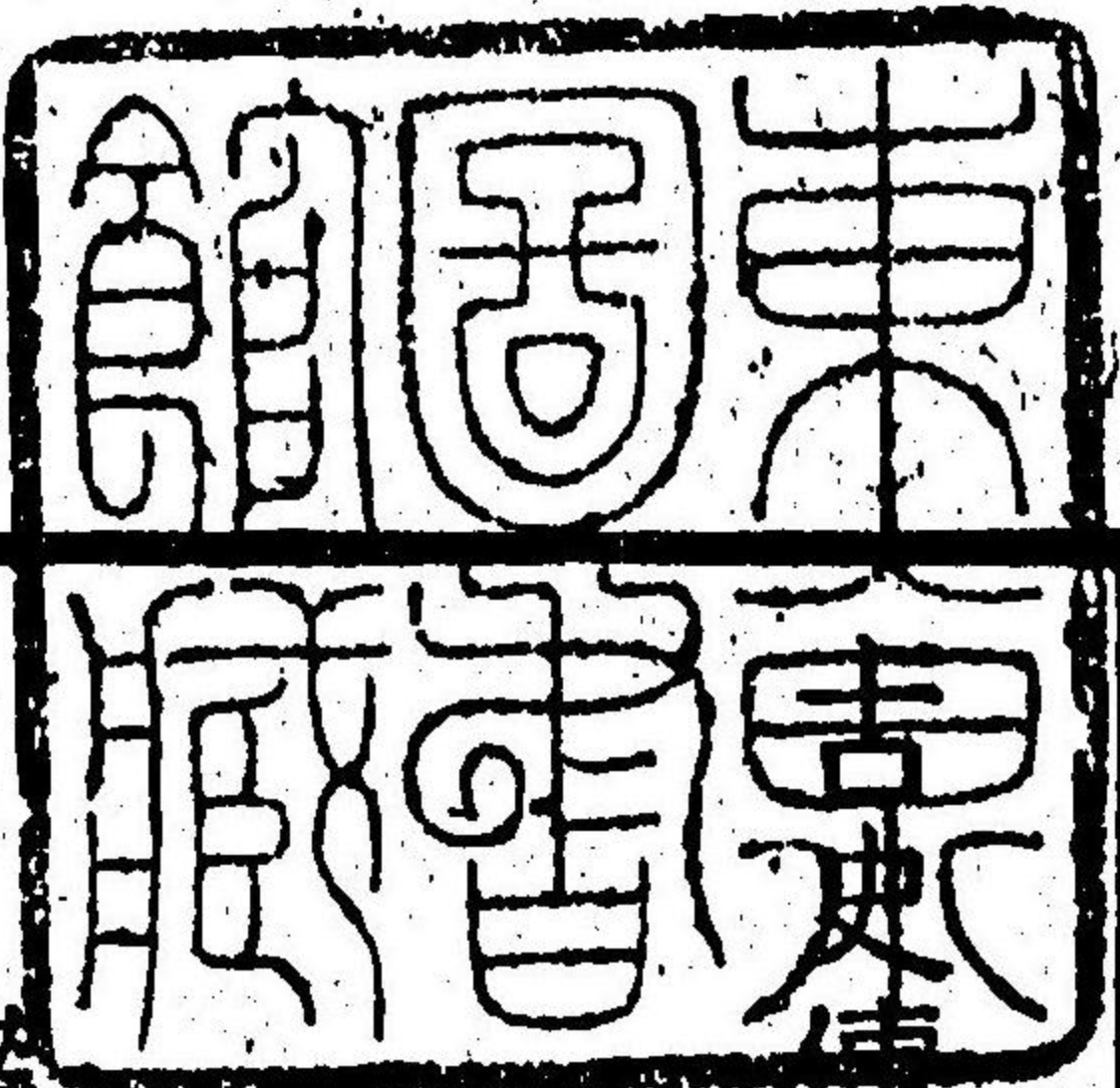
東 京 圖 書 館			
和書門	類	函	架
三	一	八	三
五	三	一	三
冊	號	架	函

古史傳

自第百卅五段
至第百卅八段

廿七





傳二十七出卷

神代下七出卷

五百三十五

爾神魯岐神魯美命出命以而。

於高天原事始而天都詞出太

詞事言依賜而天神社囿神社。

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

シメタヘゴトヲヘツラテ。タカミムスビノカミノリ
令稱辭竟奉而。高皇產靈神勅
タマハクアレハ。オコシタテアマツヒモロギアマツイハ
曰。吾則起樹天津神籬。天津磐
サカラムミタメニス。ミマノミコトノマツライハヒイシアマノコ
境。當爲皇美麻命奉齋。汝天兒
ヤノミコトフトタマノミコトレトモチテアマツヒモロギラクダリ
屋命。太玉命。宜持天津神籬。降
アレハラノナカツクニニテ。マタミタメニス。ミマノミコトノマツ
葦原中囷而。亦爲皇美麻命奉

イハヒノリタミヒテコトニニフトタマノミコトノリタミヒセヨトモロ
齋詔而。復勅太玉命。曰。宜率諸
トモノカミヲテツカヘムツルコトソノツカサニゴトクアマノミワザノ
部神而。供奉其職。如天上出儀
テシメタミヒモロクノカミヲモトモニソヘシタガハキ
而。令諸神亦與陪從矣。

神魯岐神魯美命とハ。もや高皇產靈神皇產靈神を申以
御稱あるが。常陸風土記よ。諸祖天神を云とある如く凡
て天皇祖神とちは更あす。次々此皇祖等まよ御祖あら
ぬ神等をも尊みてを申せるよと。既よ委く傳せるがよ

やし。第一段の傳見べし。神魯岐神魯美斯。斯て此段あるを。と申は言義も其段は既と説たり。高皇產靈神を天照大御神とを申せるを更れぬ。神皇產靈神をも兼て申せり。其は下より引出る祝詞ども此末ふ。論ふ我見て知べし。○命以而を御言を以ちぬ。○於高天原事始而は上件皇美麻命を葦原中囿より天降坐し給むを議せ賜ひ。平囿の事竟て後ふ。天都高御座より奉り賜ひ。予の事を始り賜ひし御事ハ更にも云ふ。神祭の事をし。も。高天原より始め給ひて。皇美麻命天降坐あむよハ。如此祭せ給予と。御言依し賜へる由あり。○まお此事をしかく心し留おきて下より引出る祝詞ども深く思ひを潜めて櫓ふゆぞ此段を読む心得の主旨なる其は遷却崇神詞

ふ。高天原爾神留坐氏。事始給志。神漏岐神漏美能命以氏。天之高市爾。八百萬神等乎神集。給比。神議。給氏云々。おの云くと約する文ハ皇美麻命を天降し給ふと葦原中囿を言向て荒振神を神擡ひ給ひし事どもを述て其道理を崇神とちよ諭せる文あり其事を高天原より事始め給ひしと云る。心を付て辨ふべし。皇御孫之尊乃。天御舍之内爾。入來坐皇神等波。荒備給比。健備給比。崇給事無志氏。高天之原爾始志事乎。神奈我良毛所知。食氏。神直日大直日爾直志給比氏。自此波四方乎見霧山。川能清地爾遷出坐氏。宇須波伎坐世止。進幣帛者云々。の文意は高天原より事始りて荒振る神を擡ひ給ひし事を神等の當昔より神隨ひ知看おむが如し。然れた皇御孫命此御舍の内より入來まして荒び健び崇る事なく荒ぶる心を神直日大直日ふ直し給比て山川の清地より遷出

まし、領き坐せと申して、其神等々道理よ詰て、否と云、さ
ゑ古文あり、此文の中よ入來の二字ハ、師説ふとりて補
正、其大祓詞後、此附録よ見えと正道饗祭詞よ、高天之原爾事始氏、皇御
孫命止稱辭竟奉皇神等之前爾申久、八衢比古、八衢比賣、
久那斗止御名者申氏、稱辭竟奉久波根、因底、因與利、鹿備
踈備來物爾相率相口會事無氏、下行者下乎守理、上往者
上乎守理、夜之守日之守爾、守奉齋奉禮止進幣者云、皇御
孫命止とある、止は乃の誤あり、祝詞考よ、止志氏の意よ
解れ、とるハ、從ひづとし、借文ハ、意ハ、高天、原ふて、神魯岐
神魯美、命ハ、事始給ひし隨ふ、皇御孫命ハ、かく稱辭竟
奉るを、皇神とち神隨ふ、其理を、知看して、云々の事を、守
奉る齋ひ奉れと、負せ奉り給ふ由あり、斯て此を、皇御孫
命の命あふら、高天、原うて、此祭ゆ事始給ひし、神魯
岐神魯美、命の當昔、あハ、神等よ、令せ賜へる文あると、
たじ、免よ、高天、原尔事始氏と云ひて、是とも、下れ、終文

よ、天津祝詞乃太祝詞、事乎以氏稱辭竟奉と云へるを、相
照して辨ふべし、此事ハ、既よ、第二十二段の傳よ、委く云
るをも合せ、○スミヤカ中臣壽詞よ、高天、原仁神留坐須皇親神漏岐
神漏美乃命遠持天、八百萬神等遠集倍賜天、高天、原仁事
始、天皇孫、尊波、豐葦原乃瑞穗乃因遠、安因止平介久所知
食天云く、崇神よ白以詞ハ、高天、原よ始賜ひし事の隨ふ、始賜ひし事の隨ふ、却ひ
給ふ祭、を行ひ給ふ由を申し、道饗祭詞ハ、高天、原よて、祭
巳始免給ひし隨ふ、皇御孫命の稱辭竟奉る由を申し、中
臣、壽詞ハ、皇御孫命の天、下所知看、事ハ、高天、原よて、
始免賜へる由を申し、三、此詞とも、言もて、行ハ、皇
美麻、命ハ、あし行ひ給ふ神祭リハ、皇祖神とち
の、高天、原よ事始め坐て、傳へ給ふ事、と云、義あるこ
と、本、詞ハ、全文を、熟く見て、知、歴朝の、○天都詞ハ、太
詔詞よ、此、詞の、多うるも、皆、同じ、意、あり、
詞事、言、依、賜、而、は、右、よ、云、如、く、神、を、祭、巳、給、と、志、て、は、其、神

あちふ白の詞を。天皇祖神とち此。大御口おのら。依賜予
依由了て。其詞を。天都詞之太詞事とは云。其は師説よ。
能理斗基登ハ。宣説言ちふ語よて。凡て能流と云ふ言は
廣く志て。上子申はふも。下子云聞はふも用ふ言はるら。
言を省死て。能理斗と此みも云ふ。詔字宣字あど上よ
きて。當とる物あり。凡て皇國言と。漢字と。全く合ざるま
傍の合へは所よおきて。當とる多し。必詔宣あどの字ふ
泥むほのら。万葉ふ告字をも謂。字をも能流よ用ひと
るを思ふべし。斗久も同。あよて。上へ申はふも。下子云
聞はふも用ふる言はり。是天都を例の如く。太は賞と死
も説。字ふ泥むべうらび。を美稱いふ詞よて。太占太玉串外ど此布斗よ同じ。多布
云ふ言も。等貴れどの字を當とるハ。例の傍此意よて。も
と太。多を添とるよて。同意あり。故万葉。哥ふハ。めでと

き事をあふとし。神は詞の美を死を感給ふ事ある故よ。
と詠るが多し。神は詞の美を死を感給ふ事ある故よ。
凡て祝詞を。詞を美麗くおのら。依物あまむ。太能理斗基登
と云あ。と有。注せる師説をも。合せ考ふべし。ちて
天皇祖神等此。大御口おのら。太詞事を言依賜予依事此
證を。まお鎮火祭詞よ。高天原爾神留坐皇親神漏義神漏
美能命持氏皇御孫命波豐葦原乃水穗因乎安因止平久
所知食止天下所寄奉志時爾事寄奉志天都詞太詞事乎
以氏申久神伊佐那伎伊佐奈美乃命云。火結神生給氏
云。此能心惡子乃心荒曾波水神匏埴山姫川菜乎持氏
鎮奉禮止事教悟給支依此氏稱辭竟奉者云。と有。もて

知_レばし。餘_ノの祝詞よも思_ヒ合_セむべき文_ヲあ_ラわ_ラず有_ル神漏義
ど今_ト目易_キを一_ト於_テ奉_テ證_トとせる_ルなり。神漏義
神漏美能命持_氏事寄奉_志天都詞太詞事乎以_氏申久と
有_レれば。神伊佐奈伎伊佐奈美乃命と云_ヨめ。事教悟給_支。
と云_マで_テ。二柱神の當昔有_シ故事を。神漏義神漏美命
此_レ大御口拔_レのら。御傳へ坐_ル祝詞ある_ナと命持_氏事寄
奉_志と云_テ。依_レ此_氏稱辭竟奉_者。云_クを語_ヲ承_トる_ルふて。
著_明あ_リ。命持_氏は御言を以_テよて。大御口拔_レら。事
依_レし賜_ヘる_ル由_ハあ_らず。是_ヲ以_テ知_レばし。
て其_ヲを。御天降の時よ傳_子坐_依事は。皇御孫命を天下所
寄奉_志時爾事寄奉_志天都詞太詞事と_レる_ルよて論_無し。
神_小白_比詞を天津祝詞と云_フ事_ハ本_ハ加_ク天皇祖神

ふち此御傳_子坐_ル故事を本_小して。白_比故_ル云_言あ_らず
後_レ爾_言あ_れては。其_レ御_詞あ_らぬ_をも。神の御前よ白_比
詞をば。凡_テ天都祝詞と云_コや。成_レば。其_ハ伊勢大御
神_此。六月を十二月_レ月次祭詞。九月_レ神嘗祭詞あ_らず。
天皇我御命爾坐_ト云_テ。其_レ詞を天津祝詞乃_太祝詞と
云_フ是_レあ_らず。然_レま_ぎも云_モて行_ケば。神祇を祭_ル事の本
あ_らず。本_ノ意_ヲ失_フ。○天神社_因神社。令_稱辭竟奉_而ハ祈
年祭詞_小高天原爾神留坐_皇睦神漏伎神漏彌命以_氏天
社_因社登稱辭竟奉_皇神等能前爾白久云_クと有_レ依_テ
記_セる_ナと。徵_よも云_ハが如_し。大嘗祭詞_六月_レ次祭詞
あ_らず。も加_ク有_リ共_リ

天神地祇の御社を定免て、稱辭竟奉ることハ、神魯岐神魯美命此御言依よ因れる由あり、但し元書よ天社因社とあるを、天神社因社と書べき文字を省きて書ること、加茂翁説の如くあまむ今は正しく書とり、只天社因社と云ふ言ふれる理を思ふべし。天神因社を謂ゆる天神地祇了て、其社々殘定齋ひて、怠らば稱辭竟奉れと。教賜了る由よて、其神とちれ故事をも御傳へ坐るよを疑ふし、其は世よ有ゆる事ども、悉く天神地祇の御業よ漏るよと無れむ、神祭を主を志て、其御心を取給ふこと。天下を治賜ふ御政の本あるが故あす。其御言依し此趣了て思ふ、云く此事有むを、某神の所業ぞ、其神ハあまむぶりの因縁よをりて生出て云く此事を掌る神あまむ其祭を志りて為て、其心を取給へと言教へ給ひらむよと、大祓詞よも云く乃罪出牟、如此出波云く氏天津祝

詞乃太祝詞事乎宣礼如此宣良波天津神波云く因津神波云く氏所聞食武とあるよを思ひ合せて辨ふべし。然れむよ上よ舉る鎮火祭詞あるを始免、古免祝詞よ見えある事はし、それ御傳了坐る御故事よて、故事此本よ志有れば、神代紀古事記を有まむ、古傳の有る中よ殊う崇重まむき物あるよと言はくも更あす。此を等閑よ心本を得明らかむまじき物あれむ、此道理ををく思ひて、あか開題記の初條よ云るをも合せ考ふべし。けり然しも世の初發此神等の故事残し、傳了給ふことは、天照大御神をたはし坐とも、必あは高皇產靈、神皇產靈、神ぞ專と御傳了坐けむ、然るは此二柱神をも、天地未生けすし前とす、本初高天原よ御坐して、天地を鎔造まし、世

を始矣賜へる。神魯岐神魯美命ミミツカサナレ坐カ。其神世フル此故事は。御親成坐ミミツカサナレ隨ミ元モトよレ所預看レせばカ。是を以て上カふ。此段ある神魯岐神魯美命ハ神皇產靈神カミも兼カ多カ申せカ。正カとは云るカ。然カれカ。能カ神カ王カ高御カ龜カ神カ龜カ命カ能カ皇御カ孫カ命カ。高天カ下大八島固乎事依奉之時云くと云ひて。ちて此二柱神。下文よ神魯伎神魯美命とぞ申カよりカ。は更カおカ。天照大御神も共カふ無窮カ。天於御固カ坐須神魯。坐カ。岐神魯美命とは申せるカ。祝詞考よ神留カを統紀の宣命カ。神積カとあるよ依てカ。ムツカ。豆麻理と訓カ。如く豆麻理と訓カ。言よも物の滞りて行通カ。る意ふて同じまカ。万葉五よ宇奈原能カ。返カ。尔母カ。奧カ。尔母神。

豆麻利宇志播吉伊麻須諸能大御神等とと先カ。其時。の船路比海辺カ。まカ。奥カ。ある島カ。くカ。あカ。ぎカ。よカ。鎮座カ。神カ。とカ。ちカ。をカ。申カ。せるカ。ふカ。てカ。是カ。鎮座カ。の事カ。多カ。神カ。豆麻利カ。といカ。へカ。ゆカ。凡カ。てカ。神カ。の鎮座カ。と常カ。よカ。いカ。ふカ。もカ。其カ。所カ。よカ。留カ。坐カ。意カ。外カ。はカ。とカ。神カ。祇官カ。よカ。坐カ。八座カ。の中カ。にカ。玉カ。留カ。意カ。とカ。申カ。以カ。神カ。ハカ。うカ。かカ。まカ。ゆカ。くカ。竟カ。をカ。留カ。免カ。とカ。書カ。まカ。ふカ。靈カ。ふカ。まカ。以カ。神カ。おカ。正カ。是カ。をカ。もカ。神カ。名カ。帳カ。ハカ。玉カ。積カ。産カ。靈カ。とカ。書カ。れカ。とカ。正カ。此カ。神カ。名カ。了カ。てカ。神カ。留カ。ハカ。即カ。留カ。まるカ。意カ。あるカ。事カ。多カ。もカ。曉カ。るカ。はカ。しカ。ちカ。てカ。留カ。とカ。申カ。以カ。由カ。にカ。皇御孫命カ。の高天原カ。をカ。離カ。れてカ。此カ。固カ。よカ。降カ。坐カ。るカ。對カ。子カ。てカ。降カ。坐カ。さカ。終カ。神カ。をカ。留カ。坐カ。とカ。ハカ。申カ。せカ。るカ。おカ。正カ。世カ。間カ。よカ。旅路カ。よカ。出カ。立カ。行カ。人カ。にカ。其カ。固カ。人カ。をカ。さカ。しカ。てカ。固カ。よカ。坐カ。るカ。命カ。のカ。新カ。天カ。降カ。坐カ。於カ。るカ。頃カ。申カ。せカ。しカ。言カ。此カ。傳カ。ハカ。りカ。とカ。るカ。物カ。ありカ。神カ。とカ。たカ。神カ。集カ。神カ。議カ。あカ。どカ。のカ。類カ。よカ。てカ。凡カ。てカ。神カ。のカ。御カ。子カ。のカ。事カ。よカ。いカ。ふカ。言カ。ありカ。古カ。ハカ。凡カ。てカ。加カ。牟カ。とカ。崩カ。るカ。後カ。此カ。言カ。よカ。てカ。正カ。しカ。りカ。カカ。ニカ。とカ。はカ。後カ。てカ。読カ。むカ。をカ。音カ。便カ。はカ。崩カ。るカ。後カ。此カ。言カ。よカ。てカ。正カ。しカ。りカ。らカ。びカ。凡カ。てカ。二カ。とカ。をカ。音カ。便カ。はカ。崩カ。るカ。後カ。此カ。言カ。よカ。てカ。正カ。しカ。りカ。をカ。加カ。牟カ。とカ。云カ。はカ。音カ。便カ。よカ。てカ。非カ。木カ。をカ。許カ。其カ。稻カ。をカ。伊カ。那カ。某カ。船カ。をカ。布カ。那カ。某カ。をカ。いカ。ふカ。類カ。ふカ。てカ。上カ。ふカ。あるカ。時カ。音カ。のカ。轉カ。るカ。格カ。あカ。りカ。とカ。てカ。猶カ。祝カ。詞カ。考カ。のカ。説カ。をカ。論カ。をカ。れカ。とカ。るカ。皆カ。さカ。るカ。○高皇產靈神を事どもあり大祓詞後釈よ就て見べし。

云とて奉齋詔而と云はでは神代紀と古語拾遺とを採
て文を成せるおと徴よ云るが如し但し前よち髻華山
陰ふ及字ハ於ある
はしと師の云れとる信ふ磐境を起樹と云べきよ非ざ
まむ此文いかあり造天津磐境而起樹天津神籬外ど
やうふこそ有げれ磐境ハ玄外をち神籬を樹る境域
あまバ外と云まると依て文を成しうと後ふ思
は悪うむし故よ本書のまふ記し於然まを吾孫字を
む例の如く皇美麻命と改免於儲まと神代紀よ此文を
第百二十九段よ採れる大物主神を祭る事を記せる次
よ書けけ天照大御神の宝鏡を授賜ふ事の前よ記さ
れとるを以て記傳十五此四十一葉の表よ書紀彼段ふ
て此神籬磐境も大物主事代主二神ふ係て云る物ふ
正と云れしより四十二葉の表まで凡て其義をもて解
れし説ども皆非あむそは此神籬磐境此と拾遺よむ
彼宝鏡を授賜へる事此次よ記せると事實此連きを能
く考へ辨すあむ自ら著明あらむ物ぞ此事徴ふ云
ばうむしを言漏せる故ふ
事此因よこよ記し故
○吾則をば上ふ天照大御神

此御靈宗の御鏡を授賜へばは對言て詔ふ御言れ也其
は古語拾遺ふ大御神此寶鏡を依し賜へる事のちし次
ふ此御言れ有もて知はし神代紀を此文次第を誤ま
ること上よ云るを思ふべし
○天津神籬を古語拾遺此段の本注ふ神籬者古語比茂
呂伎と見え崇神天皇紀よも神籬此云比莽呂伎とあり
神籬の訓注神代紀ふ有べきふ崇神天
皇紀よあるハ師言の如くいかあり言義ハ師説ふ榮
樹を立て其を神此御室とて祭るとてして云名うて
柴室木此意ゆる茂布志を切絶て比を云あり万葉三よ
吾屋戸爾御諸乎立而おと榮樹を立るを云ふはと十一
ふ神名火爾紐呂寸立而はと二十ふ爾波奈加能阿須波

乃可美爾古志波佐之。おれらも同じと有也。私紀より引く

天津神籬何物哉答謂今神祠欵先師說謂之比母呂支者蓋賢木之号欵といひ口訣云神籬者眞坂樹也纂疏云神籬謂叢祠也やあり共ふ甚く誤れる説あり非なりし。○天津磐境の訓を舊より從了

也。神を祭る場の境を石もて築周して構と係ふて古語

拾遺云崇神天皇御世此事を云所よ就於倭笠縫邑殊立

磯城神籬奉遷天照大神及草薙劍とある磯城と同じ。崇

天皇紀よ此事を載せるよハ磯城を磯堅城と有まぜ堅

字を例のおちとし其を磯字よ堅き意を去もれる物を

やけて師ハこれ磯堅城ふとりて此の磐境を伊波紀と

訓べしと云まされど磯城磐境元より同じとハ聞ゆれ

ども名は元と二於ありと○起樹とは天上ふ磐場を

起し神籬を樹る由よて其は皇美麻命の御守護と殊更

ふ御親の御靈を齋ひ祭也給ふれ也其を吾則と有る御

言よて所知と也。世の神學者よちの説よ此を大小神祇

の心法ありれど云ふハ皆心○持天津神籬降葦原中因

而はそれ天津磐境ふ齋ひ樹ゑるひし。天津神籬を持降

れと詔ふ形ゆ然れむ此神籬を常ふ榮樹をれこ生し建

ゆ類ふは非交て垂仁天皇紀よ新羅王子天日槍が將來

於る寶物の中ふ熊神籬一具とある物よ同じ状の具あ

也と所聞と也。然らでて持降也て有ること通えがとし

あらむるハ皇產靈神の殊ふ御靈を寄せ給ふる其熊神籬の事を師ハ王勝間よ熊は借字ふて隈隱あぞく同言

ふて。おもて隠れて露あらぬを云ふ。偕おは韓國よて神を祭るよ。其神體を坐カひる具よて。世小厨子と云ふ物おぞけ如く。作カてとる物ふて。外小圍みて。内の顯ふ見えざ隠カまは故ふ。久麻比母呂岐と名付とゆりや有らむと言れあるが如し。但し其説の中ふおえ元より皇國の神籬物ある故よ。皇國よて其名を負せとるぬと云えれしハ委しうらび其え垂仁天皇卷よ云、如く日槍の將來まは宝物ともた神武天皇此御世ふ三毛入野命此りしおよ渡、坐る時よ。此方より將往給りし物等あるを。日槍やがて其御裔ふて。そを持渡り來おるぬれハ熊神籬も元より皇國よ有來し具と同一カし故よ。ちり稱ゆと所思也。れハあり。此事をある所。まカと崇神天皇卷の末。まカと垂仁天皇卷。八十八年の所ぬと。○亦カ爲皇美麻命奉齋とは。天よ注ふを合せ考ふべし。

兒屋命。太玉命ふ。今かく石境を起して。吾が自カから齋カす。已し神籬を持降カして。汝二柱神も。亦皇美麻命の御爲ふ。齋カひ奉れと詔ふぬ也。亦字此御言の眼字あり。此字よ淡自カおらむ物あり。著明。けて此神籬を。後よ神祇官西院よ。八柱神を祭賜ふ起原お也。其は古語拾遺の神武天皇段お爰。仰カ從皇天二祖之詔。建樹神籬。所謂高皇產靈神皇產靈魂。留產靈。生產靈。足產靈。大宮乃賣神。事代主神。御膳神。已上。巫所奉。とほる。從皇天二祖之詔を。正しく此の詔を云也。齋也。皇天二祖をハ高皇產靈神皇產靈神の御事を漢文よかく申せるあり。其を此八神の中よ。此二柱を第一カと奉とほと上よ論へ已し神祭此事とも神此故事。天津祝詞よ傳り坐るぬと。凡て此二柱あるを以て推へ知るべし。

然るを或説ふ皇と高皇產靈神を申し天と八天照大御神を申しと解るハ非あり若然もあらむ八神の中神皇產靈あくて天照大御神にをし坐落き物なや けて右の八神は神名式神

祇官西院坐御巫祭神八座並大月 神產日神高御產日神次新嘗

王積產靈神生產日神足產日神清和天皇紀貞觀元年正月二十七日神祇官無

位神產日神高御產日神王積產日神生產日神足產日神並奉授從一位神靈日神

並奉授從一位同年二月丁亥朔神祇官從一位神靈日神高御產日神王積產日神生產日神足產日神並奉授正一位

位とあり印本二月の文も生產日神を脱せり今は一本依 大宮乃賣神御食津神事代王神と載されぬ然ま

ぞ大宮乃賣神と下三神を後ふ加祭と給へる其

此八神の中上此五神ハ神位を授奉らましこと上

引く御紀み見えたる如くある大宮賣神と下三

神に神位を授奉らまし事ハ此三神を延喜の頃給

と加奉れる了て貞觀の頃をいまだ八神よ加はり給

はざりし故あり然らば貞觀元年より五十年あり前疑ふも有べしれど彼書ふ此三神のハとゆえ疑ふく後

疑ふも有べしれど彼書ふ此三神のハとゆえ疑ふく後人の延喜式よと下て加筆せるあ正其を拾遺は從皇天

二祖之詔とあるは上も云如く正しく此の吾則云とある勅を云依文ある其詔ふ此三神を祭るべき由

緒に無れハあり然依を記傳十五の四十二葉表官の八神を祭る濫觴との大物主神を祭る事を混

官の八神を祭る濫觴との大物主神を祭る事を混ふして八神の中ハ大物主神も坐すべき事代主神のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

坐を如何と云ふかハ八神を皇孫命の大御身此守護のみ

ひ給子はよそ有々は。其に皇美麻命の御命を長く留む
は方ふ幸子賜ふ御靈と。生居まは方ふ幸賜ふ御靈と満
足坐は方ふ幸子賜ふ御靈を。三に御靈を。此時かく御名
おけ坐て。三座ふ別祭に賜へるあ也。師説よ。神代の初よ
御名此見えたる活
我、神面足神を八神の中ある。生産靈足産靈神よ當られ
たるハ甚く違子る事あり。其に第四段の傳ふ云、るを合
せ考ふべし。斯て師説よ。玉留産靈神と申はハ何
ある神と云ことの説あきハ思ひ漏されし。其に何
我以て知あれば。彼擲玉饒速日命に天降らるる時ふ。天
皇祖神の授賜子る十種の神寶此中ある。死返玉てふ名
此。魂留産靈よ。生玉てふ名此生産靈ふ。足玉てふ名此足
産靈ふ符ひ。うお鎮魂祭ハ。令義解よ。招離遊之運魂鎮身

體之中府。故曰鎮魂とある由緒の御祭あるよ。八神殿の
前よて行をはる事よも由有れば也。此御祭此事
まよ其神躰の事
あど神武天皇元年の末條よ。委
く注し辨ふるを見て知べし。○復ハ許登邇と訓はし。
別の意れ也。○率諸部神而。おの大詔此まふく。太玉命
此神事ふ仕奉る諸部緒此神等を率とにし趣を。既ふ云
牙也。第六十一段
の傳見べし。○供奉其職如天上之儀云く。皇朝の儀
禮をしも。高天原よ事始はて。天皇祖神の此時かく勅ひ
屬し御式ふして。邇く藝命とに次く。推古天皇此御世ま
では。神事政事ともふ神隨よ。そ此勅よ因循ひ給ひ來ぬ
ゆま。此天皇命此御世了。上宮太子始はて唐風を取用ひ

給_レ牙_ルとめ起_レて。中臣鎌子連甚_ク加_レ此_ニ國儀_ヲ用_ヒし
 免_レ奉_レて。其_レより後遂_ニ神隨_ルある古式_ヲ多_ク廢_レて。未_ダ
 き徒_ラおどは。其御儀_ミみ勿_レ唐儀_ヲふと_レて立_ラせと_レて。と思
 ふ許_{バカ}てよ成_レれるおや。既_ニよ委_ク論_ヘゆが如_シ。開題記秋
 三葉裡_{ヨリ}。冬卷二百三
 十四葉表_{マデ}よ論_ヘる
 を見_ベし其餘_ノ條_ヲ
 も事_ヨふま_テハ論_テ也。

爾日子番能邇邇藝命將天降
 坐出時先驅者還白云於天出

八衢背長七尺餘出神居而上

光天原下光葦原中囿眼如八

咫鏡白矣即遣從神而令問出

時不得目勝問矣故天照大御

神高皇產靈神出命以而詔天

ウズメノカミニタマクイマシハドモアレタワヤメニ
宇受賣神曰。汝者雖有手弱女。
トイムカフカミオモガツカミナリカレモハラ
與伊牟迦布神面勝神也。故專
イマレユキテテヨトヒアガミコノスルアモリサマト
汝往而可問吾御子出將天降
ミチヲタレゾカクテヲルトノリタマヒキカレアマノ
出道誰耶如此而居詔矣。故天
ウズメノミコトユキムカヒテトハストキニヤチマタ
宇受賣命往向而問出時八衢

ナルカミコタヘマサクアハクニツカミナハサダビコノ
出神答曰。吾圀神。名獲田毘古
カミナリイデカルユヱハキ、アマツカミノミコアモ
神也。出居由者。聞天神御子天
リマストツルユヱニマキムカヒマチテサモラフトマラシタマヒ
降坐出故。參向待而侍焉。白給
キアミノウズメノミコトマタトヒケラクナムチサキダチ
矣。天宇受賣命復問曰。汝先立
ユカムカマタアレサキダチユカムカコタヘマサクアレサキ
行乎。抑吾先立行乎。答曰。吾先

立而啓行焉。天宇受賣命復問

曰。汝者到何處。皇美麻命者何

處。到耶。答曰。天神御子者當到

築紫日向高千穗。穗觸出峯。吾

者應到伊勢狹長田。伊須受出

川上。顯我者汝也。故汝可送吾

白給矣。爾天宇受賣命還詣而

報其狀矣。

先驅者ハ佐伎波良比乃加微と訓ばし。文選注よ先驅天
見え。○天之八衢ハ師云知麻多は道股の意ハ右例の彌
みて方々分行く岐の幾れも有るを云此は天よ降
道此衢あり。今云尔雅よ四達謂之衢と
○背長七尺尺

を佐加せ云は。此字此音我取れる。はと本と云は。此古言
う詳あらば。師説もか。けて背長七尺餘と云は。俗小人
此長立を背と云は。只凡そ此長立の事。此如く聞ゆれ
ど。若其義あらば。只小長とのみ云は。き小背をしも云は。
は。下小参向待而侍焉。を白し給するを思ふ。天神御子
此御幸の前ある故。小膝折伏せて。両手を於。項根を下
げ。畏ま。て待給ひし故。其背長のとく見えし。うば。如
此語り傳ふし。凡也。背長七尺云くとある文の上。紀記
よ成文を探ぬる時。小此文をも採し。うど。後ふと。前
く考ふ。ゆよ。信。ぐと。丸。思。ハ。る。故。よ。今。ハ。除。き。と。也。○上
光天原下光葦原中因之神等。此御稜威を振ひて。進み給

ふ時。御體と。輝。れ。發。れる。と。味。鉏。高。日。子。根。神。の。天
上。よ。昇。り。給。ひ。し。時。よ。二。丘。二。谷。此。間。小。映。ら。せ。め。と。有。る
處。小。既。了。云。也。第百十二段。今。あ。く。ち。皇。美。麻。命。御。天。降。此
時。あ。ま。ば。枉。神。等。を。近。扱。け。じ。と。殊。よ。御。稜。威。を。振。ひ。て。ぞ
坐。ま。し。ら。む。次。よ。啓。行。と。有。を。も。思。ひ。合。ま。べ。し。○眼。如。八。咫。鏡。と。は。御。眼。の
光。れ。い。み。じ。き。由。を。殊。小。大。く。譬。と。る。凡。也。神代紀。よ。あ。む
云。ひ。眼。字。絶。然。似。赤。酸。醬。也。と。云。文。あ。れ。ど。其。口。尻。明。耀。と
を。採。さ。る。由。也。既。よ。徴。了。論。ず。る。を。見。べ。し。○遣。從。神。而
令。問。之。時。ち。皇。美。麻。命。此。御。供。よ。立。あ。り。と。神。等。小。天。神。の
御。言。を。含。め。て。出。居。る。神。小。問。え。給。ふ。凡。也。○不。得。目。勝
問。矣。は。纂。疏。小。謂。目。眩。惑。而。不。得。相。面。也。と。あり。下。此。面。勝

と相合せて心得るし。

師云、今俗言よ、人ヲ押勝者ヲ麻牟賀知那流と云も、此と云り出さるべし。

書紀の注よ、或人の獲田毘古神のさる貌を、し、智惠の明ある事ヲ云て、それよ諸神を恐れ憚りて得問よ、往、鳥由、云るハ、例此私、此、言あり、容、○手弱女は上、ふ貌よ、怖れとること著明きも、此をや。

出と云

第三十二段の傳見べし。

○雖有は、師云、那禮、母と訓べし。

阿

礼、母此約

○伊牟迦布神云、神代紀ふ、天稚彦、久

志く還、參らぬ時、高皇產靈神、此勅よ、蓋、因神有強禦者、あ

此強禦を、伊牟迦布と訓るを、射向、あ、と、或人、此云、此

も、其意、ふて、多牟加比敵、あむを云ふ、人よ、敵あむを弓引

と云と、心ば、子同じ

方葉十よ、天漢射向、居、而、と、あ、ハ、射

をも云べし、れど、猶然、ハ、非、じ

は、て、此は、然る神を廣く云、る、此、後、田

毘古神を指ふは非也。○與は、師云、後、世、此語、あらば、爾を

云、ば、き、多、如、此、云、を、古語の格、ある、ば、し。

與、相、對、而、と、云、意、あり。

○面、勝、を、師云、人、と、相對、て、愧、び、怖、れ、交、面、の、強、く、て、負、ぬ、れ、也。

宇受賣、て、ふ、名、を、思、ひ、合、ひ、な、し。

此、名、義、を、第、五、十、四、段、の、傳、よ、季、く、注、せ、り、彼、處、を

愧、さ、る、方、此、處、を、目、勝、と、面、勝、を、は、同、意、あ、る、う、子、よ、麻、と

母、と、通、音、あ、れ、む、言、も、相、近、し。

此、神、を、擇、出、と、る、へ、る、所、以、こ、れ、て、明、ら、し。

○專、は、師云、毛、波、良、と、訓、な、し、多、宇、米、と、訓、ハ、誤、れ、也。

和、名、抄、よ、專、字、を、太

宇、女、を、訓、て、太、宇、女、者、毛、波、良、之、古、語、也、今、呼、老、女、為、太、宇、女、也、ある、中、よ、呼、老、女、為、太、宇、女、と、云、ふ、是、太、宇、女、の、正、義、あり、土、佐、日、記、よ、お、き、あ、一、人、き、う、絶、一、人、と、も、淡、路、あ、り、然、と、も、源、氏、物、語、よ、伊、賀、さ、う、め、と、も、有、り、は、と、狐、を、き、め、を、云、ふ、こ、も、物、小、見、え、あ、り、其、を、老、女、と、云、ふ、轉、れ、る、あ、る、は、し、老、女、多、宇、米、と、云、を、姥、此、轉、れ、る、や、有、む、さ、て

名を佐太大神と申して御母を皇産靈神の御子支佐貝
比賣命よ坐おせ。既よ委く注せるが如し。第七十四段第
百五段此傳を
見て知 猿田ハ佐太を訓て即出雲国意宇郡此地名あり
此地のおと第百五段此傳見べし。猿を古は佐とけみも云べし故ふ借て
書と見也。其は和名抄よ。下總国ノ郡名よ。猿嶋佐之萬
を何れ。神名式ふ。參河国賀茂郡狹投神社。そ此本国帳
ふ。坐賀茂郡正一位猿投大明神と見也。今も猿投村と云
る在てサナギを
もサナゲを 然れむ古く猿を佐も云はれおと著明し。然
るを早く猿ま猿あど書ゆが借字ある事を忘るは
聞えて神代紀ふ。此神の容貌を口尻明耀云くを猿の状

ふ聞ゆばく書れとる。甚じき非あるおと。既ふ辨了とる
が如し。此段の徴見るべし。然れバ記傳よ。此神此名義を
解て猿田彦を尻明光彦なり。志理の理を畧く例
を備中郡名後月あどあり。ま阿を畧くハ常あり。かく
て志加流を畧て佐流を云ハ。然るを佐流と云ふ。同
じまと氏良を切れば多あり。けて獸の猿を此神の形よ
似とる故の名あるべし。此神此御名を猿よ似とる故と
せむハ本末違ふ。猿はけて猿の形此神。似とる故と
て思ふよ。鼻長きも猿と似たり。ま背長七尺餘とあり
も。猿の如く這居坐形よ。けきて其背の長さを云ふ。此
はし神ふはさほ。有免ま。這居あるふと爲むも。異
むべきよ。非若尋常の人此如く立て坐むよ。尻の明
耀と云も。似たり。はしからぬをやと言ふし。説を。猿字よ
た交て思ひ。 けて此神やがて。佐太大神ある由は。あ
られしあり。 比古てふ言れ有無のみふて。全同じ御名あり。其は出雲
風土記ふ。御名れ出所おせよ。佐太大神と記し。神代紀

小猿田彦大神とみぢうら名告はし。古語拾遺古事記お

も。皇美麻命は御詔よ。猿田毘古大神と詔言也。然れむ此

は尋常よ大神を申はとは異て。然申はき所以おそ有

り。此等此考よ依て。前ふ成文を撰究る時た。猿田毘古

告坐る処あまむ。大字あき方宜し。故今古事記よ依て。各

大字を除き終はて此神名の猿字よおきて。十二支此申

の事よ引寄せて。種く此漢意を云ひ。又ハ庚申と云事を

此神よ附會せよ。説おと師此言れとる如く。庚申と云事を

らはしき事。○出居ハ。此天ハ衢ふれ也。俗よ出迎と云事

云む方れし。○出居ハ。此天ハ衢ふれ也。俗よ出迎と云事

向は。師云向は迎の意あ也。向を迎とは異あるが如く。取

まども言ハ本一れ也。中よ向字をある軽く用ひて。参る

意のみあるも有れども。此を書紀よも奉迎

相待とあるよ依て。迎の意とハあるあり。神武天皇段

ふ。石押分之子が答。白せは詞。おくと全同じ。○侍は。此も

上よ。大因主神の隠而侍と。白給ひし侍を同意あ也。○汝

は名牟遲汝を御坐よて。共ふ卑免とる辭れら終てを既

ふ云也。○抑ハ。麻多と訓はし。○啓行を。師の美佐伎波良

波牟と訓れあるふ従ふべし。○汝者到何處。皇美麻命者

何處到耶。おの詞を思ふよ。天よ也。地よ降るふを。只廣く

葦原中因よ降るは。は定むまど。狭き一所れる。某處ふ

降らむとは。豫て定免難き事を聞えと也。此を必然と

道此学びよ深く思ひ入とらむ人。是を以て。猿田大神そ

を。自おらふ思ひ得はくこそ。此を必然と

此便宜か死む處ふ。降著し免奉らむと爲る。出迎言奉也。

導^{ミチビ}たま^ヒ成^レし給^テ予^ハは^ハあ^リぬ。○高^{タカ}千^チ穗^ホ穗^ホ觸^フ之^ノ峯^ノは^ハ次^ニ段^ニふ^注ふ^るを^シ。○狹^サ長^{ナガ}田^タは^ハ上^ニ天^ノ手^ノ力^ノ男^ノ神^ノ者^ニ坐^ス于^テ佐^サ那^ナ縣^ノと^ハあ^る處^ニ也^{ナリ}。字^ヲを^テ異^カま^シとも^モ同^ク處^ニあ^るて^ハ。即^チ伊^イ勢^セ固^コ多^タ氣^キ郡^ノあ^リ。然^{シカ}は^ハ此^ニよ^リ。狹^サ長^{ナガ}田^タ伊^イ須^ス受^ウ之^ノ川^ノ上^ニを^テあ^るは^ハ最^イ古^コと^ハは^ハ伊^イ須^ス受^ウ宮^ノの^ノ邊^ニま^でも^モ。佐^サ那^ナ縣^ノの^ノ内^ニあ^るし^と聞^クえ^と也^{ナリ}。○當^ト到^リハ。伊^イ多^タ理^リ麻^マ佐^サ牟^ムと^ハ訓^ミ。應^{オウ}到^リハ伊^イ多^タ良^リ牟^ムと^ハ訓^ミべ^シ。師^シ云^フ當^ト到^リニ^ハイ^イタ^タリ^マス^ベシ^ト訓^ミて^モ。到^リ給^テ予^ヲを^テ教^メふ^ルよ^ハ非^ヒ矣^{ナリ}。到^リ坐^スむ^こを^ヲ知^ルま^しる^故ゆ^ニ。告^グる^事あり^故下^ニお^果と^ス。○顯^{アキラ}我^ガと^ハは^ハ猿^サ田^タ毘^ヒ古^コ神^ノ此^レ御^ノ名^ヲは^ハと^ス。其^ノ出^デ居^ル給^テ予^ヲは^ハ所以^ノを^テ問^ヒ聞^クて^ハ。顯^{アキラ}せ^るを^ヲ云^フ。上^ニよ^リ顯^{アキラ}白^ク其^ノ少^シ毘^ヒ古^コ那^ナ神^ノ。所謂^ト久^ク延^ビ毘^ヒ古^コ云^ク。と^ハあ^るよ^リ。ち^テ天^ノ神^ノ御^ノ子^ヲと^ハ云^フと^也。可^ク送^ル吾^ガと^ハ云^フま^で此^ノ文^ノ意^ハは^ハ同^ク。

天^{アメノ}神^ノの^ノ御^ノ子^ヲは^ハ日^ヒ向^カ固^コの^ノ高^{タカ}千^チ穗^ホ峯^ノふ^到著^シ坐^スむ^を吾^ガは^ハ其^ノ峯^ニよ^リ嚮^ム導^ス奉^ルて^ハ後^ニ。伊^イ勢^セ固^コ狹^サ長^{ナガ}田^タ此^レ伊^イ須^ス受^ウ之^ノ川^ノ上^ニふ^到ら^むと^ハ思^フ。我^ガを^テ顯^{アキラ}せ^る汝^ニあ^れバ^ハ。其^ノ川^ノ上^ニよ^リ我^ガを^テ送^ルて^ハ給^テ予^ヲを^テ言^フふ^れ也^{ナリ}。抑^チ此^ノ大^{オホ}神^ノ其^ノ本^ノ固^コ出^デ雲^ヲを^テ發^スて^ハ天^ノ之^ノ。伊^イ須^ス受^ウ之^ノ川^ノ上^ニふ^到留^マま^し坐^スる^事と^ハ。後^ニ天^ノ照^テ大^{オホ}御^ノ神^ノの^ノ鎮^チ座^ニさ^む事^ヲな^し未^ダ然^ラよ^リ知^ルて^ハ待^マ給^テ予^ヲを^テ人^ノの^ノ得^ル知^ラぬ^事。幽^カき^契あ^る事^ヲあ^りけ^し。あ^ハ。○還^カ詣^リ而^{シテ}云^クは^ハ天^ノ第^ニ百^ニ四^ニ十^ニ二^ニ段^ノの^ノ傳^ハよ^リ注^スふ^を見^ルべ^シ。皇^{スメラ}祖^ノ神^ノと^ハち^レ此^ノ御^ノ所^ニよ^リ還^ルめ^て。猿^サ田^タ彦^ノ神^ノの^ノ有^ルは^ハ事^ノ狀^ヲを^テ報^フせ^るれ^也。

七十三百
カレコノニミコトノリアマツヒコホノニギノ
故爾詔天津日子采田能邇邇藝

命而離天磐座。裹奉眞床覆衾。

而引開天磐戶。而天降奉矣。故

稱此神曰天圀饒石彥火瓊瓊

杵命。故其援田毘古神立御先

而天忍日命於背取負天磐鞞

於臂著稜威高鞞。於手取持天

梳弓。手挾天波波矢。副持八目

鳴鏑。取佩頭槌。出劔。帥大久米

部而立御前而仕奉。天牟羅雲

命。取太玉串。天忍雲根命。宣天

津ツ諄ノ辭リ祓ト清ヲ而ハ於ラ天ヒ出キ浮メ橋ツ亦ニ

天ア出メ宇ウ伎キ士ジ麻マ理リ蘇ス理リ多タ多タ志シ

而テ排オ分シ天ワ出ケ八ア重メ多ノ那ヤ雲ヘ而タ稜ナ

威ツ出ノ道チ別ワ道キ別チ而テ果ハ先タ如レ援サ田ダ

毘ビ古コ神ノ出カ言ミ於ノ築イ紫ヒ日ガ向ニ出ツ高ク

千チ穗ホ出ノ久ク士ジ希フ流ル峯タ天ケ降ア坐モ矣リ

然サ後テ以ノ大チ來ニ目ヲ部オ為ホ天ク鞞メ負ベ部シ

天ア鞞メ負ユ部ギ出オ號ヒ起ベ於ト此イ時フ也ナ故ハ

其ソ天ノ押ア日メ命シ亦ヒ名ノ神ミ挾カ日ム命シ亦タ

名ミ天ナ津ア久ツ米ク命メ亦ミ名コ此ハ者ム產ス巢ス

天ア穗メ津ツ大オ來ホ目ク命メ命シ此コ者ハ產ム巢ス

日神出御子。安牟須比命出子。

大伴連。久米直。浮穴直。門部連。

佐伯連等出祖也。次天村雲命

者。天曾己多智命出子。天嗣杵

命。亦名明日。出子。天鈴杵命出

子。天御雲命出子。伊勢朝臣。額

田部宿禰。度會神主等出祖也。

次天忍雲根命者。天兒

屋根命出子也。

故爾ハ天、宇受賣命の復命せゆを承とせ。○詔而ハ天照
大御神、皇產靈神此いざ天降ませと詔し給ふれ也。○天

磐座を古事記よ。天石位と書れ。神代紀ふえ。本文のおを
書て。此云阿麻能以鞞矩羅と有れ。師云。位は座と同じ。久
羅韋ハ座居の意あり。まとの人の坐処此みあらば物々居
鞞あども同。石は堅固に義れまむ。あぐ高天原ある大殿
ふて。此尊に坐くは御座を云あり。○離とは其御座と
起せ奉り給ふは義あり。師のハナレを訓れとるを非。○
眞床覆衾ハ。私記ふ眞者美辭也。衾者卧床之時覆之物也。
今世太神宮以下諸社神體奉覆御衾是縁耳とあり。覆ま
字をも書とるを訓の同。或説ふ衾ハ臥裳ありと云はれ。
禪の波久毛と聞ゆはを思ふよ。然も有むりし。○曇奉と

は天降り給ふ途に程を痛ハして。其被を以て。暖ふ柔や
かふ褰み著せ奉り給へるなり。既よ出とる須勢理毘賣
下よ寐をし勢せ万葉四巻よ。烝被和。然るに通く藝命。
是時を幼穉く御坐し故あり。何を以て然ハ知れると云
ふよ。此御天降のおを。初免忍穗耳命。詔負せ給ふはよ。
降り給ふ間よ。通く藝命生坐おをも。忍穗耳
命。まてよ降り給ふ雲路ふして。生坐めとも有はる。即父
命。お替て降り給ふと有れ。其降り給ふ時。あやいと幼
く御坐せはれと云ふも更あり。然むり。穉き御子の。崇
ちの御心を。天下の青人草を恵み賜ふよ。由る。○天磐戸
事ある由は。第百三十二段。傳せるを視べし。

せは天都宮處アマツミヤコ構へし御門ミカドの戸ト也。大祓詞オホハヒノコトふ。天津神
波天磐門ナミツノイハト乎押披氏オシヒラヒノミコト所聞食武ミコトノミケノタケとある磐門イハト大同本記オホトウホンキよ。大
御神オホミカミの倭姫命ヤマトヒメノミコトよ御喻ミコトノミコトませる御言ミコトノミコトよ。我高天原爾坐オホタカヒラノミカミ氏ミカミ。懸
戸ド押張オシハリ如見見志ニミシ眞伎志マキシ大宮オホミヤ所波オホハ是處也ココニと有る懸戸ミカド是
也。懸戸ミカドハ御門ミカドの借字カケテあり。○故稱コトナフ此神コノミカミ云々。天國アマノクニ饒石ニギシ天饒石ニギシ國クニ
饒石ニギシ字約ツギ於て申せ給ふ也。天を饒ニギシはし國を饒ニギシむし天降アメノリ
はせる神ミカミ也。故コトナフ稱ナフ予オノ白シラせる由ユ也。○故コトナフ其コノ後ノチ田
毘古神ヒコノミカミ立御先タテミコトノサキ而シテ也。前サキよ此神コノミカミの御言ミコトノミコトふ。吾先オレノサキ立而啓行タテテヒキハル焉。
と有るが如し。○天忍日命アメノシノヒノミコト此名義コノナノギは。既スデよ釋トクとれど今一
抄マシの考カウ也。其コノは神武天皇紀カムヤマトノミコトノキふ賊等クサビノヒト天皇ミカド此御軍コノミイクサの嚴シカく

駁オガちたを畏オゾて。天壓神アメノオレノカミと申せ給事ミコトノミコトあるを思ふよ。此神コノミカミ也。
皇美麻命スメマノミコトを守護ウモリまして。降タらるる武備タケノヲの物を壓オはぐ如
く嚴イカき哉ハ稱ナフ於て。壓オスと申せるも亦マタ知シルるらび。○天磐アメノイハ
鞞ニギ鞞ニギ也。上カミふ出デと也。第三十二段ノミ師說シノトクの如く。磐イハハ例タテマ此堅ツル
き由ユ也。孝德天皇カウトクノミカド紀踐祚キセンソ處トコロふ。大伴オホトモ連長德タケナガトク帶金鞞オビカネニギ立タ於
壇イハ右ミダリ云々。万葉三卷マンヤフノミふ。大伴オホトモ之名ナニ負オウ鞞ニギ帶オビ而シテ云々。名ナニ負オウ鞞ニギ之ノ
事コト。姓ナリ氏ノミ錄キ
也。見ミえて下シタよ引ヒキ。七卷シチノミよ。鞞ニギ懸カケ流ル伴トモ雄廣オホヒロ伎キ大伴オホトモ爾ニ也。有
て。鞞ニギは殊ニふ。大伴オホトモよ由縁ユヰある也。故コトナフ太刀タチ弓ユミ矢ヤとめも先サキ
ふ。ま於此物ココノモノを云イハふ也。まマと九ク卷マキよ。白檀シラタネ弓ユミ鞞ニギ取ト負オウ而シテ二十
也。○高鞞タカニギ。梶カキ弓ユミ。波ナミく矢ヤ鳴ナリ鏑シ也。皆ミナ既スデふ出デと也。御誓ミコトノチカ段ノミ
也。○高鞞タカニギ。梶カキ弓ユミ。波ナミく矢ヤ鳴ナリ鏑シ也。皆ミナ既スデふ出デと也。御誓ミコトノチカ段ノミ
也。まマと天アメ

稚日子、段あ
ど見べし。○取持万葉十九卷ふ。手束弓手爾取持而○
手挾同六卷よ。得物矢手挾十六卷よ。比米加夫良八多婆
左彌二十卷ふ。伊乎佐太波佐美れどほ也。○頭槌之劔也。
師云。神武天皇紀よ頭椎劔。まど頭槌此云箇輔豆智神功
皇后卷此歌ふ。句夫菟智れどほ也。古事記神武天皇段の
歌ふ。久夫都伊。と有は是あゆ。推を延て都い伊。然て應
神天皇卷此御歌よ。加夫都久麻肥をほはえ。頭衝眞日よ
て。是頭を加夫と云る例あ也。其を久夫とも通はし云る
あ也。頭を振る俗よ加夫理。はて此太刀は日本紀私記ふ。
頭槌劔名。其頭曲を云ひ纂疏ふ頭槌者劔首如槌也。今集

人所帶之劔。有此形也。を有るが如し。劔の頭石よて。槌よ
三輪山の辺。此土中より掘出とり。○取佩之。万葉五よ都
と云を見とり。と谷川氏云也。き。流岐多智許志爾。刀利波
十九卷ふ。劔刀許志爾等理波伎あどほ也。○帥大久米部
而云く。大久米部也。天忍日命の帥。み從子給ふ益荒武男
此部を云ふ其ハ次よ引出る諸書ふて著明れ也。久米
目とも書されど共小元より。然て久米をしも云也。大久
米命の帥。みは部あればれぬ。委く下よ注し。○天牟羅雲
命云く。倭姫命世記ふも。此御天降の事を記せるよ。天牟
羅雲命取。太玉串相副從比氏。天之八重雲乎。伊頭之千別

爾千別氏天降給とあり。此餘も兩宮も傳たる。太玉串

此事は既小磐屋戸段より出て彼處より委く云は如く根抜

の香木も種く此物等と記著て。そを取持たねざは甚じ

く力い依事れるを。然ばうめ遠き雲路をしも。此命此取

持て御前拂ひ降らる。功績を稱すて。如此名も負坐る

ふや。其父神の名を御雲命と申は。○天忍雲根命云く。此

は神名秘書小載と依或書も。爾時天押雲命以天津諄辭

解除清淨而天八重雲乎出之道別道別天降坐と有るを

採れるを。既も徵ふ云依が如し。但し其本文より伴神

之太祝詞令掌除太玉命捧太幣とあり。此二事元より是

二神の本職あるを。然も有べき事あると前も天神の軌

依天津諄辭を。何れ依詞形らむと言ふ。此を疑れ。速

須佐之男命神逐の段も。天兒屋根命此被戸神とち祈

に宣ふ。諄辭あり。其を解除清淨而と有る所知と記

例のぶ。其詞を聲た。交換返し白せる故。諄辭と有

ゆ。然れば。天村雲命此取持。太玉串は。被戸神とち祈

手向奉まる物もぞ有け依。此是。被處。神とち祈。白せ

段も。委く説明せ。はて忍雲根と申せ依名義根を稱名

ふて例多し。忍は忍穗耳命此忍ふ同く。大此義。或は押

日命此押ふ同く。壓の義も有。何よても雲路を披

ありて。此二神ハ皇美麻命の左右も保護居。はて其宣せ

給ふ。依き由あり。或書此傳へを採まり。

依天津諄辭を。何れ依詞形らむと言ふ。此を疑れ。速

須佐之男命神逐の段も。天兒屋根命此被戸神とち祈

に宣ふ。諄辭あり。其を解除清淨而と有る所知と記

例のぶ。其詞を聲た。交換返し白せる故。諄辭と有

ゆ。然れば。天村雲命此取持。太玉串は。被戸神とち祈

手向奉まる物もぞ有け依。此是。被處。神とち祈。白せ

段も。委く説明せ。はて忍雲根と申せ依名義根を稱名

ふて例多し。忍は忍穗耳命此忍ふ同く。大此義。或は押

日命此押ふ同く。壓の義も有。何よても雲路を披

死す。皇美麻命を天降坐とせし功績も就る。負せる御名
此は事は論ふも更あす。此命と村雲命と天雲と
三段もも見えと。○天之浮橋ハ師説ふ。天と地との間を
三合せ考ふへし。神等此昇降に通ひ賜ふ路も懸れる橋也。空も懸れる
故よ。浮橋とは云也。和名抄も魏畧五行志云。洛水浮橋
とある。此橋也。後人此例の漢籍心此賢き説ども
云。云。不足祿也。論は交せて。丹後国播磨国あどの風土記
取る。天梯立の故事を引きて。同物も釋れ。まこと三大考も
は。天と地と判はく時。相連続なる帯も。天地は漸も
相遠放す行くも隨ひて。此帯も漸くも細く微く也。て。

皇美麻命此天降坐は時まで。是帶有しが。既も天降坐す。
おひも断離れて。永く天と地を往來止ぬる也。と有
れど。此も共考は。此加す也。其も天梯立はしも。第
如く。世も謂ふ階子の類も。磐船の泊る船居も等しき
物あり。はと三大考も謂ふ如く。天地は連なる帯も。皇
美麻命の天降坐は。断離れて。其通ひ止とゆ。あすと
云む。ハ。其後も。饒速日命の天降りも更あり。天忍雲根
命。武角見命。あどの天。上り往來ありしを。然らば此も。何
何と云む。心を潛めて思ふべきなり。然らば此も。何
様ある物ぞと言ふ。橋とは云。牙と。今有る橋の。此方此
岸也。彼方此岸も懸れる如く。天と地と此間も挂まる
物もは。非交。はと天と地を連る帯も。非交。神此御量
もて。作出給ひて。事をも節く。それに乗て。大虚空も乘

廻坐る時。はと天穗日命。天翔因翔。見廻給へる時。あ
ども浮橋よ立と。おそ言は。此物よ乗せる。おぞ知。ほし。
其を天稚日子。此天降れる事を。唯遣之とのみ有れど。
万葉よ。又方の天之探女。石船の泊し高津を。浅よける
哉と詠る。お依ま。バ天稚日子も。浮橋お乗りて。降る。お
を著き。了准へて。辨ふべし。然る。ハ天之探女は。天稚日子
の侍女。あり。○宇伎士麻理。蘇理多。志而。記傳よ。此語。甚心
得難し。と有。まど。宇伎士麻理を。神代紀よ。浮渚在。と書て。
此云。羽企爾磨利。を。何。此は。浮渚よ。乗。とる。如く。磐船。了。
神等。み。れ。一。群。よ。締。め。乘。せる。ま。直。お。蘇。理。の。發。語。を。爲。て。
語。に。繼。し。古。語。あり。前。ふ。を。在。の。義。を。思。ひ。得。ざ。り。し。う。ど。
に。ふ。よ。當。て。書。れ。し。迄。後。了。思。ふ。バ。此。を。締。り。締。り。と。活。用。く
に。と。云。ふ。も。即。締。り。狭。れる。一。所。あり。故。の。名。を。聞。ゆ。れ

ば。其。義。を。の。ゆ。て。此。其。は。清。寧。天。皇。卷。お。ほ。志。毘。臣。此。歌。お。
字。を。書。れ。し。あり。大。君。此。御。子。の。柴。垣。藪。締。り。締。り。廻。し。と。有。る。も。垣。を。結。ひ
廻。せる。趣。を。志。麻。理。と。云。は。よ。思。合。せ。て。も。辨。ふ。は。し。此。の。夜。哥
布。志。麻。理。を。ハ。節。結。あり。と。綴。れ。と。ま。は。ち。て。蘇。理。多。志。は。
ど。ハ。節。を。少。う。淡。き。よ。過。て。聞。ゆ。あり。進。發。し。れ。然。る。は。万。葉。十。七。卷。お。越。れ。立。山。を。白。雲。此。千
重。を。押。お。け。天。曾。く。理。高。死。立。山。と。詠。る。曾。く。理。と。同。言。お
て。彼。を。彼。山。此。高。く。聳。と。る。勢。此。進。う。れ。る。我。言。ひ。此。を。天
上。と。是。因。よ。稜。威。の。道。別。き。道。別。て。降。坐。り。勢。の。進。う。よ
烈。し。死。を。言。ふ。多。く。志。は。万。葉。三。卷。お。和。豆。香。山。御。輿。立。之
而。と。有。る。立。之。お。同。く。發。の。義。あり。雪。深。く。積。る。因。り。て。乘

予が本生ある出羽の秋田に居りし頃、乗るおと
時行く所此物に乗めて雪此積れる道を道別き雪わ
推行く状のバも伊都此道別道別と云ふよ叶ひて
く進うある物あり然れば彼曾理てふ名を其雪道多
別け行く勢此烈きよめ負せし名もや然れど越の辺
て曾理と名くる物をいさう異ある用ひ様此物と聞
えと ○天之八重多那雲を師説ふ神代紀に排分天八重
雲とあり出雲因造神賀詞よ天能八重雲乎押別氏万葉
二卷ふ天雲之八重搔別而。一云天雲之
八重雲隠れおど見えとめ。まると二卷ふ天雲之五百重之下
五百重れ多那を棚引よて虚空お覆ひ巨依を云ふ万葉
ふ霏霏霧まると陣雲れども書と也。ほと多く輕引とも書
る意以て書るあり薄き意ハ非ざまると書紀卷首清
陽者薄靡而為天おの薄靡をもタナビキやを訓とれども

此らの字を多那毘久と云ふ言の意よを叶ハば輕字薄
字おどよ就て思ふはうらぶ多那毘久は虚空よ廣く覆
ひ巨依はと七卷ふ棚霧合雪毛零奴可十三卷ふ棚雲利
意あり。雪者零來奴おどある棚と同じ。此は元よめ借字れがら。
此棚と云ふ物も雲霧おぞ此空よ覆へはとと同じ趣ふて。
空よ構ふる故お名けしれまは本を同意お也。具毛流と
も多く詠ある多那と登能と通音ふて同じ多那毘久を
輕引をも書きまると彼薄靡の字おど依て登能具毛流
を薄く曇る事と心得るハ誤れり。○稜威之道別道別而
は古事記ふ伊都能知和岐知和岐氏大祓詞ふ天之八重
雲乎伊頭乃千別爾千別氏天降依志奉支れどあり。今は
神代紀ある正字を用ひた。稜威此事は既ふ云め。第十五
段第二

天、靱負部とも號起ナカシとる由あり。

後、近衛府衛門、府兵衛、府多共、由今比、乃都加

佐と云ふも、此天、靱負と云ふ出とるあり。○天、押日、命、師云、清和天皇紀、貞觀

十五年十二月廿日、授河内、國正六位上、天、押日、命、神從五

位下。此、神名式、志紀、郡伴、林氏、神社とある社、あるは、

此、林氏、神社、貞觀九年二月、預官、社、姓氏錄、河内、

河内、國志紀、郡、人、林、臣、海、主、野、守、改、臣、賜、朝、臣、統、後、紀、承、和、

二年十月、河内、國、人、林、連、馬、神名帳、山城、國、葛野、郡、伴氏、

神社、大月次新嘗。統、後、紀、承、和、元年正月、山城、國、葛野、郡、

上、林、郷、地方一町、賜、伴、宿、祢、等、為、祭、氏、神、

處、と、は、と、信濃、國、佐久、郡、大伴、神社、あり。此、も、是、神、を、祭、れ、

は、社、よ、也。○亦名神狹日命オホクミナカヒノミコは、舊事紀の神代系紀、天、

忍日命、大伴連等祖、亦云、神狹日命、と有るを採れ也。然、れ、と、名、

義ハ、未、思、○大久米主命オホクミヌシノミコを、天、忍日命、亦名オホクミと定、

は、下、引、出、家、持、卿、歌、ふ。大伴、オホトモ、遠都神祖トホツカムオヤの、其、名、を、ば、

大來目主オホクメヌシと負持オヒモチて、仕ツカり、官ツカサと詠ヨミれ、し、を、思、ふ、よ。此、名、を、

更、外、也。古事記、天津久米命アマノクミノミコと云、神代紀、天、穗津大

來目オホクメ有るも、共、天、忍日命、亦名オホクミ、オホクミと論、無、

を、記、紀、と、母、別神コトカミと、爲ナシとるは、訛アヤリ也。此、事、の、訛、也、既、

あ、れ、也、今、更、云、云、然、る、を、師、古、事、記、の、天、忍、日、命、天、津、

久、米、命、二、人、と、爲、と、る、訛、也、の、説、を、取、り、て、此、家、持、卿、の、哥、

を、却、て、訛、め、の、お、は、て、久、米、と、稱、を、師、説、よ、も、を、天、津、

久米命オホクミノミコは、と、大久米命オホクミノミコと、出、ぬ、り、其、中、小、大久米命オホクミノミコを、

利、目、也。文、も、有、て、目、圓メノコロ也。大、死、了、在、し、故、久、米、と

ふ名を負賜する其久米は久流目の約ツケに依言コトにカ也
云大久米命也。即天忍日命亦名天津久米命の孫也。道臣命の亦名あり。然るを古事記よ此をも道臣命大久米命二人と為と依ハ訛りあり。此命の目多。黥る利久流目目と云し事も何も神武天皇卷よ云々見依べし。久流目を
きは。宇都保物語俊蔭卷ふ阿修羅怒れる形を出して眼
残車此輪の如く見久流弁のして云くを云ひ。今世此言
尔も人乃目此圓く大ふて。利家れる残目此久く流くを
志と依と云ふ是あ也。然る久米を大久米命の目よ因れ
依稱を志ては。其先祖をも既よ天津久米命と申せしを
如何と云ふ疑ひ有るれぞ。此は凡て名高此神此御子
孫此は代く小人異あ依奇此相の有あと此を今世

ふ次ら。は。聞ゆる事此まむ。本是天津久米命の御目此。
久流目よ坐て。久米て。ふ名は負坐る残。其子孫代く。大久
米命までも同く久流目よ坐し。ふも有べし。
流目あ也。し。世よ名高かゆる故よ。先祖の神也。此名を以て。後より称奉れるよも有べし。何れよて。母名此意ハ。ち。多。此。久米命此帥坐依軍士を。久米部とも。大久米部をも稱す。め。と言ま。依。が。如し。○此者産巢日神之御子。安牟須比命之子也。は。天忍日命は。皇産霊神の大御孫。ふ坐。由。依。也。高とも神をも無く。唯よ産霊日神と申せば。二柱産霊神を合せて申。依。例。あ。依。こ。を。既。ふ。云。予。也。
よも注ふ ○大伴連師云。大伴とは。多く此伴字帥るを以
が如し。

て云ふは、此氏の伴此、多く廣き由り。万葉七卷、オホトモ伴雄廣トモノヲヒキき大伴オホトモよとあり。また八十伴緒の中よ、此伴を殊トモ了崇トモ純トモ稱トモ美トモて大伴とハ云う。万葉二十卷、大伴の氏と名よ負オスふ。と家持卿の詠れとるあどを思ふべし。神武天皇紀よ。大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎と見え古語拾遺オモヒふは、逮オモヒ于神武天皇東征之年。大伴氏遠祖日臣命帥督將元戎、ヲ除兇渠佐命之勲無有比肩ヒキれぞ見え、此氏は祖神天忍日命とヒして世くもはら武事を以オモヒる皇朝此御守衛ミモリとあり職カクシあり。後世の左右近衛大將左右衛門督を後の稱を以て云は、彼中臣忌部五部あどを職カクシ此如し然れ此大伴久米あどハ武官あり然るを後ハ文を等ヒキばるる故、六衛府ハ太政官と申ウケれあ上代ウケよ。武等ヒキバましもあよ此氏あど甚貴ヒキあり。けり垂仁

天皇紀ふ。大伴連遠祖武日タケヒを云人見也。此人倭建命ヤマトノミコ此東トモ圍征トモありふ時よも御從ミトモせられとヒ。垂仁卷よ出とるを、より景行天皇の四十年までハ百十五年あり命長ヒキうヒし人也ヒキなり。雄略天皇オホノ御世始ふ。大伴連室屋物部連日爲大連オホノとあり。大連も後世の大連オホノの如し。上代ハ臣ヒキ姓ヒキの人をバ大臣とし連姓此人をバ大連とあて政ヒキ字執ヒキあむ大連てふ号ハ垂仁卷よ始ヒキて見えとヒ。此御代ふ。大伴氏とヒ分ヒキまて佐伯氏と云ふ出來ヒキあり。其ヒキをり大伴佐伯オホノを相ヒキ並ヒキばり。姓氏録よ見えけり後よ。大伴金村てふ人も大連オホノあり。孝德天皇の御世ふ。大伴長德連右大臣オホノあり。其子御行卿ミトモハ大納言よて大室元年正月ヒキ薨ヒキられ。右大臣を贈給へり是贈官の始あり。万葉二十卷よ。大伴家持卿オホノ此族ヒキふ喻ヒキされし歌よ。久方ヒキ此

天戸アノトひら死シ。高千穂タケケの峯ノよ天降アメノリし皇祖スメノミコの神カミ此御代コノミヨとて
施弓ハヒユミ我手タニギリ握ニも多し眞鹿マカゴヤ矢ヤを手挾タバサミそ予オノて。大久米オホクミ此は去
死シ壯士タケテを前サキよ立タて。鞍ウツギを背オウせ。山河シイハネを石根イハネさくみて踏フミ
通トホす。因クニ寛ニ志マキおろく。千早チハヤ振フる神事カミコトむけ。順ツボを人ヒトも和ヤ
し。掃ハキふと免メ仕奉シホウす。此コノまでを神世カミヨよ。天忍日命アメノヒノミコの仕奉シホウ
は神武天皇カムヤマト此御世コノミヨよ。道臣ミチノミ命ノミコ此秋津嶋アキツシマ大和ヤマト此因クニの檀原カシハラ
仕シ予オノ奉ホウれる趣オモを詠ウタれしあり。秋津嶋アキツシマ大和ヤマト此因クニの檀原カシハラ
此畝ウネ傍ビの宮ミヤよ宮柱ミヤハしら太志フチ立タて。天アメ此下コノシタ志シ死シし食クける皇
祖ミコの天アメ此日コノヒ繼ツギと嗣ツグて來クる。君キミ此御コノミヨく代ヨく隱カクさは交明カハ支
心ココロを皇邊スメラヘよ極キハ免メ盡ツクして仕シ予オノ來クる祖ミコの職シゴトと言コト立タて。授タテマけ
賜タマへる生ウミ此子コノミコの彌繼イハツツギく小見コミる人ヒト此語コト也ナリ。次ツギぞく聞クく人

の鏡カガミふせむを惜オホクまき。淨キヨクき其名ナを鹿略カノロクよ。心思ココロひる空言ムナシゴト
も。祖ミコ此名ナ多タ於オ大伴オホトモの氏ウヂと名ナふ負オヘる益荒男トモアラノヲ此伴コトトモその
反歌サナヒウタふ。師木嶋シキシマ此倭因ヤマトよ明アカけき。名ナよ於オふ伴トモの雄ヲ心ココロ於オを
免メと。劔ツルギ大刀オホタチいと磨シばし。古コノ也ナリ。分明サヤカなく負オヘて來クふし其
名ナぞと詠ウタれ多タす。是コノよて。其氏コノウヂ人代ヒトヨリく此利コノトク心ココロ思オモひ遣ヤられ
多タす。斯カて此哥コノカ此下コノシタ右出雲ミナソノ守大伴ミモトノ古慈斐コノヒ縁ツギ淡海フキ眞人マコト
そは御紀ミコキよ。勝室カチムロ八年ハチノトシ五月イツノヒ出雲ミナソノ守ミモト從ツグ四位上ヨナヒ大伴オホトモ宿祢ヤクネ古
慈斐コノヒ内豎ウチノリ淡海フキ眞人マコト三船ミフネ坐イハ誹謗ヒ朝廷コウテイ無ム人臣ヒトノミコト之ノ礼レ禁カ於オ左
右衛士ミナモトノ府フ丙寅ノ詔ミコトノコト並ナラ放免ハツメとあり。然シカ。○久米クミ直ナホは古事コト記キふ
れバ諛者ウソコトヲハ外ソトふあすしあすなり。○久米クミ直ナホは古事コト記キふ
天津アムノ久米クミ命ノミコト。此者コノモノ久米クミ直ナホ等トナリ之祖ノミコト也ナリ。をオる。其天津アムノ久米クミ命ノミコト。
やぐて天忍日命アメノヒノミコトよ坐イハせば。久米クミ氏ノウヂも。此命コノミコト此裔コノイハ也ナリ。然シカる

小。姓氏錄左京天神部。久米直高御魂命八世孫。味耳命
之後也。はと右京天神部。久米直神御魂命八世孫。味日
命之後也。をいふ。師説ふ。味の味耳と。味日と。一と聞ゆ
名はと人。名よ。比と稱。一方を誤字あるべし。をいふ。神
比と申し。そを通はして。耳を云ふも。常に此を何よ
も云ふ。よて。日耳とも。誤りハ非。但し。今是を考ふ。依
此を師説。依りて。師説を辨ふる。ハ。今是を考ふ。依
よ。先左京。久米。高御魂命と云ひ。右京。久米。神御
魂命と有。依。皇産靈神の御末。ハ。二柱相通して。何
方。も申し。例。おま。拘はる。よ。足ら。其。八世孫と。志も
云。依。天。忍日命。實。ハ。皇産靈神の御孫。ハ。坐。ハ。古語
拾遺。よ。は。其。男と。訛。傳へ。姓氏錄。大伴。宿禰。條。よ。は。五世

孫を傳へ。大伴。大田。連。條。よ。は。六世孫と。傳。牙。と。已。然。ま。才
此。八世と。云。傳。安。牟。須。比。命。と。已。天。押。日。命。亦。名。天津
此。御子。は。で。中。六世を。除。て。數。牙。ある。世。數。ハ。亦。有。ハ。依。
斯。て。此。味。耳。命。と。申。せ。る。ハ。必。也。日。臣。命。ある。べ。く。思。ふ。由
あり。其。由。を。更。あり。総。て。此。氏。よ。係。る。事。と。も。神。武。天。皇。卷
二。年。の。外。よ。季。○。淳。穴。直。和。名。抄。ハ。伊。豫。因。よ。久。米。郡。淳。穴。
く。注。を。俟。べ。し。○。淳。穴。直。和。名。抄。ハ。伊。豫。因。よ。久。米。郡。淳。穴。
安。奈。郡。を。並。び。姓。氏。錄。左。京。天。神。部。右。此。久。米。氏。を。並。比。
て。淳。穴。直。移。受。牟。受。比。命。五。世。孫。弟。意。孫。連。之。後。也。と。い。ふ。
直。一。本。よ。連。と。あり。下。よ。引。く。続。後。紀。の。文。よ。撰。ま。る。連。と
誤。と。覺。ゆ。れ。第。意。孫。連。之。後。と。有。る。ハ。撰。れ。た。誤。ハ。非。
ざ。る。ハ。移。受。牟。受。比。を。今。本。ハ。移。受。比。と。い。ふ。ハ。誤。寫。ハ。
り。今。を。上。田。百。木。が。按。せ。る。ハ。一。古。本。よ。從。へ。り。移。ハ。古。く。ヤ
よ。用。ひ。と。已。其。を。神。名。式。ハ。波。爾。移。麻。比。祢。神。と。う。き。泉。州
志。引。る。神。鳳。寺。縁。起。よ。天。古。移。根。命。と。書。と。已。然。て。淳

穴を民部式古本よウケアナセ仮名を加テ今もあリ稱ふと困人云也河内国天神部も

浮穴直移受牟受比命之後也也出之也此ま今本も移

誤れけて仁明天皇紀承和元年五月の所ふ伊豫国正

六位上浮穴直千繼等賜姓春江宿禰千繼之先者大久米

命也也何也大久米命と云既小且云如く神武天皇

此御世了功績高加也日臣命此亦名ふて天忍日命

天津久比裔孫あゆぐ古事記よ久米直祖大久米命と有

まむ大伴久米浮穴は同祖了て共了天忍日命此末れ

故了久米と浮穴と竝舉とあふぞ有るあ卷よ注ふを見

○門部連よは姓氏録大和国天神部ふ門部連牟須

比命兒安牟須比命之後也と有あよ依りて載せ也今本

を安牟須比と訓るは非あり上の移受牟受比と相照し

て此を安を訓みまよ此よ依て彼をヤスムスビと訓る

き事をも牟須比命とは高御魂神御魂命をか後て稱せ

るれ也然れを浮穴直條あゆ移受牟受比命と申は皇

産靈神の御兒よて天忍日命は其子ぬるまを

灼し其を門部とは御門を衛る部よて連を其を掌は職

あまば必は御門の開闔を掌は大伴氏此同族れあべき

由緒をも思ふはし神名式了大和国宇陀郡ふ門僕神社

比命あどを祭れけて天武天皇紀ふ十年四月門部直大

嶋賜姓曰連と見え姓曰連と有る八家別ある文の重

れらるる文徳天皇紀。齊衡三年十一月。侍整正六位上。

門部連名繼等賜姓興道宿禰。あぞ見えとす。○佐伯連。あ

は姓氏録左京天神部。佐伯宿禰。大伴宿禰同祖。道臣命

七世孫室屋大連公之後也。と有ゆ。依まゆ。まと右京天

造天雷神孫天。神人命之後也。をもり。神人多一本。小押

人。とあり。押日の誤。あるべし。天雷神と有る。此文多助

けて云。予。半須毘神と聞ゆ。れ。外。かく白せ。ゆ。こを無し。れ。亦。大伴宿禰の條。よ。上

了引。とる文。了。連。けて。雄略天皇御世。以。天。鞞負部。賜。大連

公。奏。曰。衛門開闔之務。於。職。己。重。若。一。身。難。堪。望。與。愚。兒。語。

相伴奉衛左右。勅。依。奏。是。大伴佐伯。二氏。掌。左右開闔之緣

也。と。ゆ。也。大連公と。名。即。室屋大連公を云。予。語。と。也。雄

と。ゆ。る。人。あり。佐伯氏ハ。かく。室屋大連の時。よ。分。此。文。ゆ

れ。と。ゆ。故。よ。上。了。引。と。る。文。了。其。後。也。と。云。る。あり。此。文。ゆ

を。見。て。は。大伴氏。此。鞞負部の長。を。志。て。衛門開闔を。務。ま

と。此。天皇。此。御世。と。す。始。ま。る。事。此。如。く。聞。ゆ。れ。と。も。鞞負

は。元。と。す。此。家。小。屬。と。は。職。も。て。衛門開闔も。此。職。小。屬。る。

元。と。ゆ。の。務。れ。ゆ。其。古。語。拾。遺。よ。神武天皇の即位の事

門。掌。其。開闔。と。有。然。る。ふ。此。御世。まで。御門。此。左右を。一。人

志。多。務。免。來。し。を。室屋大連公。よ。是。職。を。賜。へ。る。時。よ。一。人

ふ。て。也。堪。が。と。此。重。職。あ。れ。む。其。兒。語。連。と。二。人。了。て。左。右

を。務。免。む。を。奏。せ。る。故。よ。奏。し。此。任。小。許。し。賜。ひ。し。と。す。大

伴佐伯。兩。氏。よ。て。左。右。此。開闔を。掌。る。事。を。成。れ。ゆ。由。あり。

天武天皇紀云。十三年十二月戊寅朔己卯。大伴連佐伯連賜姓曰宿禰とあり。佐伯と和名抄云。佐倍木とあり。然て皇皇子稻背入彦命之後也。云くと有る。これ此氏の本行天て。大伴と同祖の佐伯氏ハ末あり。然を佐倍木てふ言此意を。景行天皇卷云。其氏の出る所云べし。また大伴と同祖此佐伯氏より別れたゆ氏も多ク也。其雄畧天皇卷談連此下云。挙はて大伴佐伯兩氏此門部を師て委く注ふを見べし。衛門の事を掌る趣を。江家次第御即位儀。開章德興禮兩門伴佐伯帶劔著五位禮服率門部三人入自兩門居會昌門内左右廂胡床云。次伴佐伯兩門下壇對北面立。次令門部開門還本座諸門皆應各還云。兩氏閉門云。はと大嘗會儀。伴佐伯宿禰開大嘗宮南門。あとも有る。

知法し。文武天皇紀の大嘗會の処よて大伴宿禰手此を拍豎楯桿とも見えと也。手拍とハ名あり。

按ふも門部連を云しは。大伴氏も同祖ふて其安牟須比命と有るは。天忍日命此父神あると疑れし。抑牟須比を名も負せゆ神とち。二柱の皇産靈神を産靈此本於大神よ坐せば。申はも更れぬ。火産靈。稚産靈。津速産靈。興台産靈れど。此等の外よ。活産靈。足産靈。薨留産靈。あともませむ。今申云。まど。此を伊邪那岐大神の司命の御靈よ坐限りよ非らば。皆必産靈と申云。法き。小縁からぬ由有て。負坐る御名あゆふ。此安牟須比と申は神ハ志も。浮穴門部兩氏此文よ。御名の出給牙ゆ耳よて。何れ産靈此功績あはし神とも知られ給はぬ。年頃心懸れは。

を熟くお按ずば。此を天之底立神。亦名は天角疑魂命。亦名在乃依。まゝと天之常立神とも。ほと天之壁立命とも。万角天角已利命を各まゝ角魂命とも。申せて天手力男神。お坐坐れ。然るを此神。天照大御神の石屋戸を闔て幽居せ。其戸を開けて引出し奉れる功績。お依りて。手力男をも。石門別とも御名お負坐し。然して大御神の新宮。此御門を守護て。其開闔を掌給ずる故。阿居多都命と申せる。あ。居。郡。阿豆。委。居。命。神社あり。これ居まケ。既よ委く説あるが如し。此等の説を第四十どお注せるを立復り。然れを。是神の御末。此氏く多加る。見て考へ合ふべし。

中ふ。必其功を繼て。御門を守衛。其開闔を掌。武事。もて仕奉る氏家。れく多叶は。總謂あるよ。一氏も然る家。此無支は。不審し。死事。此極あらまや。其を彼。石屋戸。段。功績。あ。諸神。一柱も。御從して降。給はざ。依を無く。其。未ある氏。其職を繼づるを。一氏も無れば。あ。人。も。此。不。審。を。起。せる。人。あ。く。阿。居。多。都。命。と。申。れ。を。手。力。男。神。の。亦。名。れ。り。と。悟。れる。人。れ。き。ハ。然。る。物。り。て。石。門。別。命。と。申。れ。も。其。亦。名。あ。依。事。を。さ。ず。よ。爰。お。是。御。天。降。の。心。著。と。る。人。れ。き。ハ。餘。れ。る。鹿。略。お。こ。そ。爰。お。是。御。天。降。の。時。ふ。天。手。力。男。神。此。御。靈。を。副。賜。ず。依。事。ハ。上。お。見。え。ぬ。ま。ど。其。現。身。此。御。從。して。降。給。ず。る。事。此。所。見。づ。る。が。甚。異。れ。お。合。せて。必。此。神。の。掌。賜。ふ。依。職。を。し。天。忍。日。

命掌給ひて。仕奉^シ。其御末^シ此氏^ニ。其職を繼て。教負^ヒ此武職^ヲ。更^ニ此衛門^ニ此職^ルも。仕奉^レれる例^ハ此^ハ是^ニ。忍^ミ日^ノ命^ヲ。やの多^ク天^ノ手力男^ノ神^ヲ。坐^シ以^テ故^ニあること。更^ニ疑^ハ無^シ。交^ハ物^ナあ^リ。故^ニ是^ヲを以^テ。天^ノ手力男^ノ神^ト申^ヒ。御名^ハ此^ノ方^トなり。其^ハ出自^ハ茲^ニ系^スもて行く^ニ。皇^ノ産靈^ノ神^ノの御子^ト。天^ノ底立^命。命^ト亦^名。天^ノ角^ノ疑^ミ。之^ハ御子^ト小坐^スお^シ。既^ニ出^セる^ニ。如^シ。此^ハ事^モ第^四十^九段^ノ。委^ク考^ス。牙^ノ辨^ヘへ^リ。第^五十^七段^ノ石門^別命^ハ此^ノ下^ニ。は^ハ第^六十^段玉^主命^ノの^下。ま^ニ第^百三^十一^段阿波^咩命^ノの^処あ^リ。を^合せ^テ考^ヘて。然^シて^ハ此^ノ段^ノの^説味^ハ見^ユ。然^レも^ハ安^年須^比命^ト。其^ハ條^ノ理^ハ自^ラお^シ。著^明あら^ハむ^ニ物^ト。然^レも^ハ安^年須^比命^トと^申ひ^モ。天^ノ底立^命此^ハ亦^名。名^ハ此^ノと^示更^ニ疑^ハひ^有は^シ。死^物あ^リ。然^ルは^ハ此^ノ神^ト。ま^ニ天^ノ角^ノ疑^ミ魂^命を^モ申^ヒ。御名^ハ此^ノ

義^ヲ聽^テ産靈^ノの^意よ^テ天^ノ國^ヲ作^ラる^ニ。牟^須毘^の功^績貴^カ死^コを^既小^云。如^クお^シば^ハ死^ス。此^ハ由^ニ。第^二段^ハ傳^ハち^テ天^ノ忍^日命^ト。亦^名。天^ノ手^力男^ノ神^ト。此^ハ出自^ハか^ク此^ノ如^ク。小^シて^ハ其^ハ手^力此^ノ卓^シ。右^ノの^功績^坐。故^ニ別^ニ其^ハ御^靈を^モ副^降し^給。牙^ノ座^を御^戸開^神を^申て^ハ後^ニ大^御神^ノの^相殿^小祝^を給^ヒ。ひ^は四^至此^ノ御^門も^齋。給^ヒて^ハ豐^石窓^櫛石^窓神^トと^名。負^坐し^ば。其^ハ現^身は^ハ御^天降^此御^從。立^シて^ハ天^ノ此^ハ壓^靈を^負坐^ス。其^ハ功^績を^負持^テ。日^臣命^ト。次^ニ其^ハ御^末ある^ニ大^伴佐^伯。そ^レ道^ハ仕^奉。最^モ貴^カ死^事死^ス。け^レ。御^戸開^神と^申せ^ルを^大御^神の^相殿^ヲ祝^ヒ申^セる^事ハ。第^百三^十四^段見^ユ。御^門を^齋。給^ヒ事^ハ。

第五十七段見え日臣命の事然れ。聖武天皇紀天平

勝寶元年此詔ふ大伴佐伯宿禰波常母云如久天^{ツネ}皇朝守

仕奉事顧奈伎人等爾阿禮波師云諸本よ如字あくて語

常く詔ふ由ありま^レと常^ニ世^ニ中^ニて云^フとく此意^ハも

有べし顧奈伎と^レ己^ノ身命^ヲを顧^シて勤^シく仕奉^ル

を云ふ万葉二十防^ノ守の哥^ハ今日^ハたり^ニた^ルの^ハ牙^ハゆ^ハ汝^ハ多^ク知^ル

見あく^テ大君^ハ此^ハ醜^ニ御^ノ楯^ト出^スぬ^ル我^ハを^ハ何^カ也^ト汝^ハ多^ク知^ル

乃祖止母乃云來久海行波美豆久^{ツク}屍山行波草牟須屍王

乃弊爾去曾死米能^レ杼爾波不死止云來流人等止奈母聞

召須師云汝多知と^レ此^ハ二^ノ氏^ノ現^在る^人を^ハさ^して詔

世云傳へ來る^ハれ^ハ海行波云^ク美豆久^ハは^ハ万葉^ニ二十^ノ上^ニ

美豆久白王とも有^テ水^ハ濱^ニる^ハれ^ハ草牟須屍^ハ屍^ノ上^ニ

如此云^ハ生^ルを^ハ云^フ抑^テ海^ハも^ハ山^ハも^ハ死^スぬ^ハ古^ノと^ハ古^ノ先^ノ祖^トを^ハ

云來抄^ハ御言^ハある^ベし^ハ王^ハ乃^ハ弊^ハ天皇^ノの^ハ方^ハて^ハ邊^ノ意^ハあ

巴俗^ハ御馬^前と云^フが^ハ如^シ能^ク杼^ル波^ハ不^レ死^ハ事^ハれ^ハく^ハ安

御為^ハふ^ハこ^ハ捨^ルめ^ハ此^ハ意^ハあり^ニ万葉^ニ十三^ノ吹^風母^ハ和^者不^レ吹^ル

あど猶^ハあり^ニ此^ハの^ハ語^ハ凡^テの^ハ意^ハを^ハ天皇^ノの^ハ御^從命^ハ仕^奉り^テ

ても^ハ海^ヲ行^ク時^ハ事^ハあら^ハ天皇^ハ此^ハ御^為命^ヲを^ハ去^テ

ら^ハ即^チ其^ハ山^ヲ命^ヲを^ハ捨^ルむ^ハと^ハれ^ハ也^ト是以^テ遠^ク天皇^ノ御^世始^メ

氏今朕御世爾當^レ氏母内兵止奈母遣須師說よ内兵はウ

兵止^ハ而^テ仕^奉來^ルと^ハ何^カ也^ト内^ノとい^フえ^ハ殊^ニ親^ミ給^フ稱^ハあ

り内臣^ハま^ハ伊^勢大^神宮^ニ内^ノ人^ハを^ハ云^フあ^ハる^ハれ^ハど^ハ皆^ハ然^ル也^ト

云ふ名^ハあり^ニ云^フと^ハあり^ニ然^レて^ハ内^ノ兵^止の^ハ下^ニ心^ハ中^ニ古^ノ止^ハ波

と云^フ五^ノ字^ハ有^ルれ^ハ也^ト師^ハも^ハ云^フれ^ハあ^ハる^ハ如^クむ^ハげ^ハお^ハ聞^クえ^ハば^ハ行

文^ハの^ハ省^ハ死^スて^ハ抄^シし^ハ故^レ是^レ以^テ子^ハ波^ハ祖^ハ乃^ハ心^ハ成^ル伊^ハ自^ハ子^ハ爾^ハ波^ハ可

在此心不失自氏明淨心以氏仕奉止自氏奈母師云成伊

助辞あり。自も助辞あつら。曾といふ勢よ近し。祖乃心多
成去とは父此欲思へ。心子の如く。其を成果去をいふ
子尔波可在。まこせ。此子と云ふ物あるべし。此意あり。
此心不失。祖の心を成去べき義を失へば。是か
世々の祖此海行者云く。と云ひ來。男女并氏一二治賜夫
れる志を成去べし。を此意なり。男女并氏一二治賜夫
云く。師云并氏は男女并てあ。一と教く。よは非
よ。大伴氏男よ。牛養稻君家持あ。と女よ。三原佐伯氏
を男よ。浄麻呂常人。毛人。靺鞨女。ハ美努麻女見
え。と。正。抑。あ。く。の。氏。と。此。中。よ。大。伴。佐。伯。を。か。万。葉。十。八。
く取分て治給ふ事ハ上代よりの例あるべし。万葉十八
卷。大伴家持卿。お此詔詞を承て詠れし長歌あ。其末
了。大伴此遠都神祖の其名残。大來目主と負持て仕
し。官海行。う。ば。水。漬。く。屍。大。皇。此。邊。ふ。こ。そ。死。免。顧。を。せ。し
を言ふて。丈夫此清き彼名を古と。今此現。了。流。さ。子。依。古

を古よ。正あり。流。ち。子。る。ハ。所。流。り。て。未。祖。此。子。等。ぞ。大。伴
流。と。云。グ。如。し。と。人。も。云。へ。る。グ。お。と。し。祖。此。子。等。ぞ。大。伴
と。佐。伯。の。氏。は。人。祖。此。立。依。辭。と。て。人。子。は。祖。の。名。絶。び。大
君。ふ。順。ふ。物。を。云。ひ。續。る。言。れ。司。ぞ。梓。弓。手。ふ。執。持。て。劔。大
刀。腰。よ。を。正。佩。交。朝。守。正。夕。の。護。め。ふ。大。王。此。御。門。此。守。正
我。を。除。て。且。人。は。有。じ。と。彌。多。て。思。ひ。し。麻。佐。る。大。皇。此。御
言。此。幸。の。貴。く。し。有。れ。姿。を。有。り。て。其。反。歌。了。大。伴。此。遠。都
神。祖。乃。奥。都。伎。を。志。依。く。標。立。て。人。の。知。依。く。を。何。正。奥。都
墓。所。あり。標。立。と。云。ひ。て。標。立。と。云。ふ。意。よ。あ。る。古。言。の
例。也。正。其。と。い。ち。著。く。人。の。知。ば。う。正。ふ。標。立。と。云。ふ。子。る
正。あ。は。て。大。伴。の。氏。家。此。如。此。や。お。を。無。正。し。も。是。を。め。間。也
く。天平寶字元年。ふ。橘。奈。良。麻。呂。朝。臣。此。藤。原。惠。美。仲。麻。呂

が、姦惡を攘むと謀れる時ふ。大伴、古麻呂、佐伯、大成、大伴、古慈斐、佐伯、全成、あど云ひし宿禰等、此黨せるよと發覺れて、誅はれし事あり。此、奉をし御紀り、謀反と有り、案を用ひむと謀るる事、發覺れて、さる惡名よ坐り、兵も然る事あり、案よは鎌足公の入鹿を誅せしと事の趣き異らば、然る彼公、此奉を、今、世まで、其功業を稱え、奈良麻呂朝臣、此の奉、今、史籍よ、謀反、此名を、殘せり、但し、此、功、遂と、事、成、げ、ると、依、れ、る、事、あり、斯て、大伴、佐伯、此、人、此、奉、よ、黨、せ、ら、れ、り、し、も、元と、り、大君の、辺、ふ、こ、そ、死、免、徒、り、ハ、在、じ、を、言、立、ぬ、人、く、あ、ま、バ、義、を、見、て、勇、み、進、む、心、と、也、然、る、惡、名、を、殘、さ、れ、て、ぞ、有、る、是、と、め、え、て、此、氏、人、此、大、き、家、く、は、漸、く、お、勢、ひ、を、失、ひ、衰、牙、も、て、來、る、遂、お、其、家、く、け、絶、く、お、成、り、て、今、し、は、御、即位、大嘗會を始、神代の故、案、を、逐、賜、ふ、大御禮儀、ふ、也。

大伴代、佐伯代とて、他、氏、人、を、雇、ひ、給、ふ、事、と、成、ぬ、る、は、最、も、悲、志、死、事、あり、かし。阿波、此、の、兩、氏、を、も、代、あら、ぬ、其、血、統、を、現、し、出、て、用、ひ、給、ハ、む、由、も、

の、ち、て、類、聚、因、史、ふ、弘、仁、十、四、年、四、月、壬、子、改、大、伴、宿、禰、爲、伴、宿、禰、觸、諱、也。日本紀畧、天慶六年七月一日癸未、賜、參、

議、正、四、位、下、伴、宿、禰、保、平、爲、朝、臣、外、と、見、え、と、也。師、云、淳、和、

諱、を、大、伴、と、申、せ、り、抑、古、姓、よ、も、名、ふ、も、何、り、も、大、と、云、え、崇、免、稱、美、ある、物、あり、よ、今、此、氏、罪、あ、き、よ、大、て、お、お、を、在、除、れ、と、る、心、う、し、必、大、の、か、は、り、お、美、稱、を、添、ま、不、し、き、わ、さ、あり、万、葉、七、卷、お、伴、雄、廣、き、大、伴、と、を、免、る、哥、此、詞、あ、ど、よ、依、て、廣、伴、宿、禰、あ、ぞ、こ、そ、有、ま、不、し、れ、

○次、天、村、雲、命、者、云、く、此、を、豐、受、大、神、宮、禰、宜、補、任、次、第、ふ、天、牟、羅、雲、命、天、曾、己、多、智、命、子、天、嗣、杵、命、子、天、鈴、杵、命、子、天、御、雲、命、子、也、と、有、る、戎、取、れ、る、也、

を徴よ云るが如し。

御鎮座傳記。天村雲命、神皇產靈、神六世孫とあり。是ま古傳ときこえ

○伊勢朝臣イセノチノミおは姓氏録左京天神部サキミヤノカミ伊勢朝臣天底

立命孫タテノミコ天日別命アメノヒワケノミコ之後也。有依を取まじ。

孫をヒコを訓。孫のらびハツ

コと訓て、裔の義よ見るべし。天日別命ハ神武天皇の御世ふ出と依人

ふて度會氏ツタヘノミ此祖あるが。大神宮例文及度會氏系圖よ天

村雲命ムラウミノミコ此子天波與命アマノナミ此子とあり。

塙本此例文。天波與命あきハ脱とるあり。

外布此氏の事ヲ神武天皇卷天日別命此所ふ委々云は

し。○額田部宿禰ヌケノタノベノミおハ姓氏録攝津因天神部セツノミ額田部宿

禰角疑魂命ヌケノツノミ男ヲ五十狹經魂命イツノサヤノミ之後也。

まよ此ヲ並びて。委文連角疑魂命男伊

佐布魂命之後也ともあり。

右京天神部ミナトノカミ額田部宿禰明日名門命アスカノカミ三世

世孫天村雲命アメノムラウミノミ之後也と有依よ依て載せじ。

まよ是額田部よ並びて。

額田部、厩王、額田部、宿禰、同祖。明日名門命十一世、孫御支、宿禰之後也ともあり。支一本よ与と作じ。けて明

日名門命ヒナノカミ三世孫天村雲命アメノムラウミノミ有依を上カミ此補任次第と合

せ考ふまば其天嗣杵命アメノツノミやめて此明日名門命アスカノカミれるまを

知られ亦是姓氏録の二條を相參考ふれど伊佐布魂

命明日名門命アスカノカミ同神あることを知依を補任次第と參考

ふ依よ其御父角疑魂命ツノミやめて天底立命アメノソコノカミよ坐おを炳焉

加也。是を以て上よ引く伊勢朝臣條ふ天村雲命の孫ある天日別命を天底立命此裔とハ云へり。はと

其伊佐布魂命イサノフタノミと申は之既ふ第四十九段ふ云依如く天

手力男神テカラノカミ亦名天石戸別命アメノイソノヒワケノカミの別名お也故是を以て明日

名門命と申は御名も有る也。此は日神の御門を明給

御名れる也。然れど天嗣杵命と申はも天手力男命の示

と既云り。然れど天嗣杵命と申はも天手力男命の示

名ふて。應て天押日命ふぞ有る也。然てかく考合也れど。

此神はあり。御名は多死ハ有けり。其は第四十九段

男神天石戸別命伊佐布薙命明日名門命第五十七段

出せる櫛石窓命豊石窓命阿居多都命天背男命第六十

段了出せる玉主命天石門別安国玉主命第三百一十一段

は出せ依天石帆別命當段ある天忍日命神狭日命大久

米主命天津久米命天穗津大來目命天嗣杵命也。故り

餘七段の御名あり。此をみれ別神のごと傳子來し故り

古今此學者とち皆。はて天嗣杵命と申は名義ハ衝杵

惑ひてぞ有る也。はて天嗣杵命と申は名義ハ衝杵

るはし。嗣杵を衝と言は清濁不疑ハ有はれど。次字主基

也も云ひ。處就を嫁繼を云ふ類多く。第七十二段は出ぬ

依衝杵等乎留比古命も有る也。然まは其御子も鈴

杵命と申はも。共小杵小由ある名もて。鈴杵とて。鈴を飾

に著る依杵あるはし。杵を杵とも書ること。天御雲命と云

名を其子天村雲命は功績とて。其御父の名をも稱すけ

む。子の功績とて及て父も然る。はて額田部氏も二流

有也。其一流也。既は出と依天津日子根命は御末もて其

額田てふ言は本あるが。此事は第三十九段の。其氏人此

住る處や。ぐて其地名とれ。天村雲命は一流。まも其地

小住るの。或は別れ依由有めて。此氏も負依もの也。其

自の異よして。同氏を稱する。此例。○度會神主は天村

いと多り也。其も其処も云べし。○度會神主は天村

雲命此子。天波與命の子。天日別命と云ひし人。神武天皇

の御世よ。勤し死功ども有_レて。伊勢國造_レ不_レ定賜ふ。上_レよ

出せる伊勢朝臣も。卽是系_レれぬ。此_レ國造本紀伊勢風土記

委_レく_レた。神武天皇卷よ斯_レて此_レ氏_レ此_レ神宮_レよ仕奉_レし始_レは。

神宮雜例集_レふ。垂仁天皇二十五年。五十鈴宮鎮御之時。天

見通命。天兒屋根命十二世大若子命。天牟羅雲命七世御

共供奉_レと_レる時_レ也。大若子命は外宮此書等_レふ。天日別

命。一名天子。彦圀見賀岐建與束命子。彦田都久禰命子。彦

楯津命子。彦久良爲命子。大若子命。一名大乙若子命と_レあ

也。凡_レ不_レ是_レ。くり後の事_レ。垂仁天皇卷○天忍雲根命此_レ天

兒屋根命此御子_レ也。由は天神壽詞_レはと藤原系圖_レ荒木

田系圖_レあぞ_レふ見_レえと_レ也。

爾天津彦火瓊瓊杵命。於高千

穗二上峯。天降坐出時。天暗冥。

晝夜不別而。人物失道。物色難

別。茲有土蛛。名曰大鉗小鉗二

人奏言皇美麻命以命出御手

拔稻千穗而爲粃而投散于四

方則虚得開晴白矣于時如大

鉗等所奏搓千穗出稻爲粃而

投散出則即天開晴日月照光

焉因曰高千穗二上峯既而移
幸襲出高千穗穗日二上峯矣

此段を日向因風土記曰杵郡知鋪郷の故事哉全く取て
文を成せゆと徴ふ其本文を出して謂れるが如し。但
此風土記の全編を今傳えらるる日本紀と仙覚が方
葉注よ引るとな合せ見て誤を訂して出せゆあり
て高千穗二上峯をば即前條より高千穗之久士布流峯と
云ゆ山此一名外也二上を舊く布多賀美と訓み師も此
訓を用られて其山の状中央小峯二ありて然云はき

山名ゆゑと因人語まじり。凡て古ふ二上山と云。依れ皆峯二
ある山あはせを言れとまじり。其在中古とせし訛言ふあそ
有ま。太古とは決然て。布多能煩理と唱けむと所思る凡
也。師説ふ。凡て古ふ二上山と云。るを皆峯二ある山あり
とて。フタカミてふ説を用られし。萬葉二卷七。卷八
見ま。二上山。二上山を詠る。哥どもふ。二上山乎。第。世。登。語。將
と云ふも有あ。多思をれし。凡る。詠み。近江。因。三。上。山
くは。フタノボリ山。三ノボリ山。を呼けむを。訛れる。や
有。然るは其高峯。此進上れる。状の。二。分。し。故。負
依山名。依ま。二。賀美と云。ては。都。て。語。此。道。よ。叶。を。更。必
也。二能煩理と云。では有は。じ。た。語。此。格。ある。了。況。て。天神
壽詞。小。天。忍。雲。根。命。を。天。此。二。上。小。奉。上。て。天皇。祖。神。小。天

都水を請賜ふ。此神天の浮雲よ乗て。天此二上。上。上坐
して。賜を。降れる事。也。也。下。の。第。百。四。十。三。段。の。本
然。れ。バ。天。照。因。も。同。名。此。山。は。る。哉。大。同。本。記。ふ。是。上。れ
依神。字。天。牟。羅。雲。命。と。名。て。此。功。小。依。り。て。天。二。上。命。と。名
を。賜。り。る。由。見。え。と。也。此。は。地。名。依。二。上。山。と。也。天。此。二
上。山。上。れる。故。の。美。名。と。聞。ゆる。ふ。此。名。を。同。記。の。別。本
方。と。他。此。古。書。と。も。よ。天。二。登。命。と。書。と。依。も。多。加。也。此。事
也。第。百。四。十。三。段。此。一。傳。二。上。を。書。ある。を。尤。強。て。二。上。と
よ。出。せ。り。就。て。見。る。べ。し。訓。む。と。也。外。無。れ。む。此
を。例。と。志。て。二。上。を。も。然。訓。ぶ。き。あ。せ。論。ひ。有。ま。お。と。こ。そ。

是よ就てまよと按ふ。常陸風土記久慈郡大田郷の所よ。珠賣美万命自天降時。綺日安命自筑紫国日向二折峯至。三野国引津根之丘云々と云ふ文あり。此二折峯とハ疑。あく二上峯のことあまぜ二折と云ふを二上せは上下。相反して然云ふ謂ひれは折は折の一畫を落せる。よて此峯れ二進上れる状よ正二折之峯と未云け。むと思ひしものと熟く思へば此は折誤りて二折。あるべくぞ所思ゆる然れども猶をく考ふべし。○天。暗冥よ。物色難別までは聞ゆる隨此文あれば注去。あ。ふ及ば。但し其訓を師の記傳す。○土蛛を古事記ふ。土。雲を作るを借字あ。神武天皇れ御世ふ。新城戸畔居勢。祝猪祝ふと云ふ。土蛛の名あり。景行天皇れ御世ふ。青白。打猿。八田国摩侶。小片鹿奥。小片鹿臣。津頬あ。云し土蛛。あ。神功皇后れ御世す。田油津媛ちふ女土蛛。其文。

等を視るよ。カ強く。衆類多く皆皇命よ從む。岩窟土窖。れど小住て人を害し。殘暴まる梟師等を蜘蛛よ準子て。如此號け。其を攝津国風土記。檀原宮御宇。天皇世。と有よて。師説よ。神武天皇。紀ふ。高尾張。邑有。土蜘蛛。其。爲人也。身短而手足長。與侏儒相類。皇軍結葛網而掩襲殺。之と有れ。此形よ因て稱られ。始と云て。其餘の。も此小例ひて是稱を付ふるふも有。然るよ新井氏。おちぐもと云し。国神と云ぐ如し。古語。ク。と云し。は神と云語の轉。よてクモを云ク。の轉。あり。ち。虫の蜘蛛。小寄て云し。非。土蜘蛛。書る。後。此。字あり。蜘蛛をクモを云ふ。ハ。韓地の方言。よて。今。朝鮮。此人クモと云れり。是本。我。固。此語。ある。彼。固。子。習。と。も。知。る。ら。び。と。云。ゆ。此。説。を。不。可。し。久。母。と。云。名。本。よ。也。

皇國の言あり然れど本我國此語ある故彼へ習子あり
と云ふを宜し凡て韓語は然る例も多きぞうしまた
或人クモはコモリよて土隠と云ふ
稱ありと云ふ此も然も有べきなり
儲はと今世よ吉備

因れども大石を積て作れる大おほ岩窟處くふ多く有

て土人此傳ふ昔火雨の降し時諸人此隠れし跡あり

や云と彼國人語れり今思ふよ是らも上代ふ土雲等此

住りし蹟あるはし火雨此おをは後の傳此虚説ありと

言れども如き石窟ハ吉備國此みり非矣諸國ふ多く

ふ由ちて此此二人の土蛛を下此事等を奏せるは人を

殘害し者ふは非ざれども土中ふ住し故ふ後よ此稱を

負せあるれざるなり師説よも既よ志
○大鉗小鉗を万葉

注ふ鉗を鉗とも作あり孰ふても其訓詳あらざ
とて刑具あるは何よ土雲ありとも此を云くの功も有

れども然る忌はしき名を買べくも非矣まと鉗を字書類

ふ鉤也と有りてツリバリを訓む故姑く鉗此字音を用

ひて加武をは訓り然ふても其名義の詳あるよは非終

ども字は元々り假字よる大頭小頭此意ふは非ざあり

加夫加武同語ある由を冠を加夫理とも云ふが如し猶

第一段の傳見合まべし又狼も同義あるう考ふべし

めし此考子當れらば其衆類多死ぐ中ふ二人此頭等あ

り○稻穂初と和名抄ふ唐韻云稻和名早稻世晚稻比穂

和名糙漢語抄云毛美與米穀雜也とあり此を諸異本を

保一云加知之祿米穀雜也とあり此を諸異本を
ある事とも抄せり但し此中ふ晚稻を比穂と云ふハ
一本の文あると此を通本ふ於久天と有るぞ宜きさて

通本よ。稻了伊祿と云ふ。訓あきハ落とるれ也。ちて拔稻千穂而爲糲と有まバ。其山小。自然了稻の生多。依を拔取てと云。依如く聞ゆれども。此故事此由緒。因りて。高千穂を名よ負。依由あまむ。皇美麻命の。天と正持降らち。稻穂を云へり。然れど此ハ。前尔大御神此依し。賜牙依齋庭の穂ふぞ有る。依然依よ其を糲よちて。四方尔投散し給はく。虚此開晴るむ。故を知居とる土雲。はと最奇也。死者れゆら正。抑土蛛ちえとる。此土雲始先。依はく。窟よ住る故よ。土蛛と云ふ。名こそ負れ。案よハ人種ふて。其人種の始先を。伊邪那岐伊邪那美二神の生給する。依まバ。此土雲あどハ。其生給へる人種此始祖ども。此長存せる者等。よも有はし。そ下よ出とる。事勝因勝長狭神と云ふ。伊邪那岐神の子。有依多も思合。合をべし。如此思ふ。付ても。大鉗小鉗ち

ふ名の義。大頭小頭。あらむと臆度ら。あり。又然る。いみじき長存の人草頭。れりし故よ。此山の石窟よ住居て。此時此事よあひて。かくちて。此時皇美麻命。ち。依幼。教牙白せる。ふも有べし。稚く坐依あむ。既よ云。如くれまバ。天兒屋根命。そ此御手代とちて。物志給ひらむ。事を云ふも更あ。事おそ異れ。兒屋命の。皇美麻命。此御手よ代。正給ふ趣。天神壽詞ふも。見とて。下ふ出。本文の如し。第百四十三段。斯て其言。此。如く爲給牙。ば。即天開晴て。日月も著く。照度れる由あ。正。○日月照光焉。日此照。由は。沼河比賣歌ふも。青山小日。が隠らバ。ち詠み。れ。何くれと。其趣の聞ゆ。依を。月此照。光る趣。是の傳よ。正前よ。所見と依事。れし。故此了。因り

て考ふはよ。月此見迄初と云ふ。必此此時れるはく所思
るあり。然れど此の文たゞ一かとり見てハ他は多うる
日此見えざは元より非虚のち暗冥の正し故
の暗のりしは。明よある事なもう。然るは。月も豫美
云て。日月照光とは語り継ぐ。然るは。月も豫美
固うま。大地此底根ふ付て成れば物ある。断離りて後
も。大地は屬從ひて旋る故。月豫美と稱ふこと。既よ委
く説辨へと云ふ。此事ハ第二十六段第二十九段
此傳を次くよ。其断離れし時は何頃と云ふと。知るきふ
見て知べし。其断離れし時は何頃と云ふと。知るきふ
非は。古傳此趣小頼に。其様を推度はよ。大國主神の
往還し給ふは。時の事を思ふ。其頃を云ふ。大地は附連

れると著く。其との皇美麻命此天降坐までの間よ。思
ひ合ふべき事も無て。今し御天降あはる後。かく見と
初しは。其断離れる時。必此此時れるはき事。更ふ疑
ひ有はしく所思也。前よ靈此真柱を著せる時ハ。此風
時ハ皇美麻命の天降坐せる前後の間。抑天日大地月豫
よや有らむと云しハ。猶未しかり。抑天日大地月豫
美此三は。靈此真柱此第四圖ふ著せる如く。もを連死て
在らふ。天日は。第五圖の如く断離れて。大地と豫美と
は。大國主神の御世まで。連死て在し。此時ふ至て断
放れし事は。伊邪那岐。伊邪那美。大神此生成し賜ひ。日神
月神此生坐は。是御國此君の定はり賜ひて。天降來はし

身の微少とを思わざるあり。大地を虚空に漂ひ日
属ひて周旋する人の知らず。日此旋ると思ふこと。譬
へば船に乗りて川を行く。舟は其はく。在りて。岍の
移ると見ゆ。如し。其を案。岸の徒る。非。舟
此行あるを以て。此理を悟る。此。日ハ動。地と月を
どせめて云ふ。あり。また。予。此。天。日ハ動。地と月を
周旋ると云ふ。説を。西洋人の説。因りて。云。出。り。と。謗
は。人。も。有。れ。ど。此。を。古。傳。の。説。は。然。く。見。え。る。事。案。よ。と。正
て。考。出。と。依。る。説。の。古。傳。は。合。る。外。固。人。此。説。は。似。る。事。案。よ。と。正
強。考。ある。説。の。古。傳。は。合。る。外。固。人。此。説。は。似。る。事。案。よ。と。正
依。る。考。ある。説。の。古。傳。は。合。る。外。固。人。此。説。は。似。る。事。案。よ。と。正
も。古。く。地。動。此。説。有。け。り。○。此。後。ふ。ま。と。漢。籍。を。見。る。に。彼。土
は。云。此。等。は。お。を。總。て。天。皇。祖。神。と。ち。此。奇。く。妙。なる。産。靈
は。理。を。資。り。て。定。れる。事。外。ま。だ。更。よ。人。の。小。知。智。も。て。測
正。識。は。き。限。り。よ。非。交。抑。阿。米。と。ハ。即。日。は。お。を。豫。美。と。は
即。月。の。事。ある。の。其。天。日。は。お。を。は。既。ふ。次。々。委。く。言。了。れ

む。其。を。措。きて。月。豫。美。は。お。を。を。言。む。ふ。速。須。佐。之。男。命。は。
豫。美。固。ふ。入。坐。る。を。月。夜。見。命。と。申。し。そ。此。御。託。宣。ふ。も。吾
を。月。神。外。正。と。詔。牙。依。よ。て。論。ひ。れ。く。万。葉。よ。佐。く。良。復。壯
子。は。と。月。讀。壯。士。那。と。詠。み。直。ふ。月。讀。と。も。云。る。は。月。や。の
て。夜。見。固。ある。徴。よ。て。此。を。斷。離。れ。て。月。を。見。え。初。し。頃。々
正。云。ふ。古。言。は。残。れる。語。形。は。お。を。き。事。既。よ。次。々。注。依。の。如
し。古。言。よ。月。豫。美。と。云。る。を。月。は。夜。ふ。見。ゆ。依。物。ある。故。り。
かく。云。ふ。を。云。依。人。も。何。れ。ど。其。は。本。を。知。ら。ざる。未。し。地
説。は。て。三。大。考。ふ。論。牙。依。如。く。月。夜。見。固。を。も。を。大。地。の。根
底。ふ。屬。て。在。し。故。よ。地。ふ。隔。ら。れ。て。日。は。光。暉。さ。う。と。依。事
れ。く。常。よ。暗。か。正。志。の。斷。離。れ。る。後。よ。是。固。ふ。も。亦。晝。夜。此

定はり出来しおを言ふも更れ也。夜見、固の大地に附也。しちど暗か也し事也。
夜見と云よて論ひ無く、豫美と云也。即闇也云ふが如し。其を今、世ふまら、南北極の辺りには夜固と云も有るを思ふべし、日遠く、大地は隔らゆる故、然る固、儲はと有るあり此は准へて、豫美固此事をも思、をし。 儲はと天照固也。既ふ云、依如く。内方ふあはる。月夜見固也。大地ぬる固也。如く。外方よ在り。と視ゆる也。其は望遠鏡といふ物を以て、覗ふ。白く光也。て見ゆ。依所也。此、大地の海と同じ。秀起る浪穂さ。牙よ見え。彼、む飛く。を見ゆる所也。陸よ。山を覺し。死も見ゆる也。其むらくを、古哥ふ。月也。桂と云へり。偏と其をたぐ。よ振放見ま。バ兔の白。おき立。る状も見成は。ゆる故。ふ俗。ハ然も云ひ。赤縣よ。てハ。月中有。免あども云めり。然れど。其を安談あれ。を論ふ。足ら。ば。尚。日月星あどの委しき事は。別

よ著せる。太界古曆。ちて如此思ひ續くれ。皇御孫命此傳ふ。就て見べし。ちて如此思ひ續くれ。皇御孫命此
天降坐る時。物の色目。此分が。多く。人等。道ふ。惑ふ。まで。暗冥。う。也。し。は。其。斷離。ゆる。故。の。異變。ふ。ぞ。有。る。む。斯。て。其。斷放れし所也。必也。謂ゆる。南極。此邊。ぬる。は。し。其は。此。大地。よ。も。上下。と。前後。と。何。也。北極。を。地。首。あ。は。る。南極。を。其。尻。方。あ。れ。密。あ。也。尚是をり末の考、予ハ大誠、詞再釈、荒る所よ云ふ。を見るべし。 因曰、高千穂、二上峯、とは。上よ云ふ。如く。峯。二上。也。ふ。進。也。立。依。る。が。千穂。の。稻。を。拔。散。して。晴。ある。高山。ぬる。故。り。かく。號。と。る。由。也。也。○襲之。高千穂。穗。日。二上。峯。襲。を。精。く。は。熊。襲。固。と。も。云。て。筑紫。嶋。を。五。と。爲。し。其。一。を。

云予る名ふて。後よ定られと云。日向国此南方半国許と
也。大隅薩摩此地までを總て云し。上代の大名あり。此地
と。既に第八段よ注予れ。斯る是。高千穂峯ハ。上此白杵郡
智保郷ある。高千穂山を別ふして。諸縣郡よありて。霧
嶋山と云ふ。神名式よ。日向国諸縣郡霧嶋神社。仁明天皇
紀よ。承和四年八月壬辰。日向国諸縣郡霧嶋峯神預官社。
文德天皇紀よ。天安二年十月廿二日。授日向国從五位上
霧嶋神從四位下。とあり。師云。此山を日向国の南に極ふ
て。大隅国に堺あり。神代紀よ。二上をある如く。東西と分
れり。峯二あり。山下。東霧嶋。西霧嶋。西ある峯は。大隅国よ

屬也。桓武天皇紀よ。延曆七年七月己酉。太宰府言去三月
四日戌時。當大隅国贈於郡曾乃峯上。火炎大熾。響如雷動。
及亥時。火光稍止。唯見黑烟。然後雨沙峯下五六里。沙石委
積可二尺。其色黑焉。とあり。此山此事あり。抑此山此と
と委く聞く。霧山をも霧嶋山とも云て。東ある峯ハ。日
向国諸縣郡西ある。大隅国贈於郡あり。東ある峯殊ふ
高く。とて。鉾峯と云ふ。頂よ神代の逆予として立て。詣る
者よ。を拜む。語傳予て云く。伊邪那岐伊邪那美命。天浮
如く見ゆる物あり。天沼予を以てか。交搜り。其処。天
降賜ひて。其予を逆様。下し給へるあり。霧嶋山と云も
此由あり。と云ふ。此迹。命此御古事を彼。如此て
二柱神の御事よ。混予て。傳へ誤。免と云あるべし。如此て

西ある峯はやく卑し。頂を正やく下登る道は傍谷
よは常よ火燃何が依然る故ふ。火氣布峯と云ふ。日向此
言ふ。常を氣布を云故ありはと此火時よ依てのみじく
熾ふ燃上正て。黒烟天をた布ひ。石砂遠く飛散こと何正。
日向大隅薩摩此因人ども神火と云て畏み拜む。霧嶋明
神の社を麓ふあ正。大なる社外正をぞ。凡そ此山の内夏
き此花盛む。目も何やありとぞ。其外異しき樹も種々
何正。山半より上ハ樹を一も外く。只細ある焼石此み
ありとぞ。又山此内よ。処く大ある。はて此山。於茲よ登正
池多く有て。大なる蛇は免りとぞ。詣る人多此を暴ふ霧の起正て。大風吹出地動をたぞろ
たぞろ志き音志て。闇此夜乃如く暗がゆて。路も見途分

終ばう正ふ爲ふを有て。せも安まば。此霧ふた布のま風
ふ吹放ぬれて。込れる者も何正。然るよ神代の故實と云
て。謂ゆる先達形依者。人よ教子て。手おとふ稻穂を持せ
行て。もし此霧起ぬれむ。其を以て拂ひおく。行なば暫ぐ
間よ天明ゆて。事故あしとぞ。篤胤云。皇美麻命の始め天
て霧此起れる。稻穂を以て拂ひ賜するは。即其山れる
こと。上り出と依が如し。然るよ此霧島山。天降始先此
有。おまは前後の達こそ有れ。彼も此も共よ。天降始先此
山ある故よ。共よける事の有ハむ。風土記よ。か此山。於
郡れる山。此傳子此み残ゆて。お此諸縣。郡ある山の傳子
を失ぬり。其を師も云れ。とる如く。古此風土記ども。を
遺り。日本紀と。仙覚が万葉抄。おとよ。往く引る此み。おそ
も記し。あり。全此を傳をら。げれば。其。全書お。霧島山。此事
む。然まむ。彼山。此山。とも。お。稻穂の古事の有ハ。依故よ。今

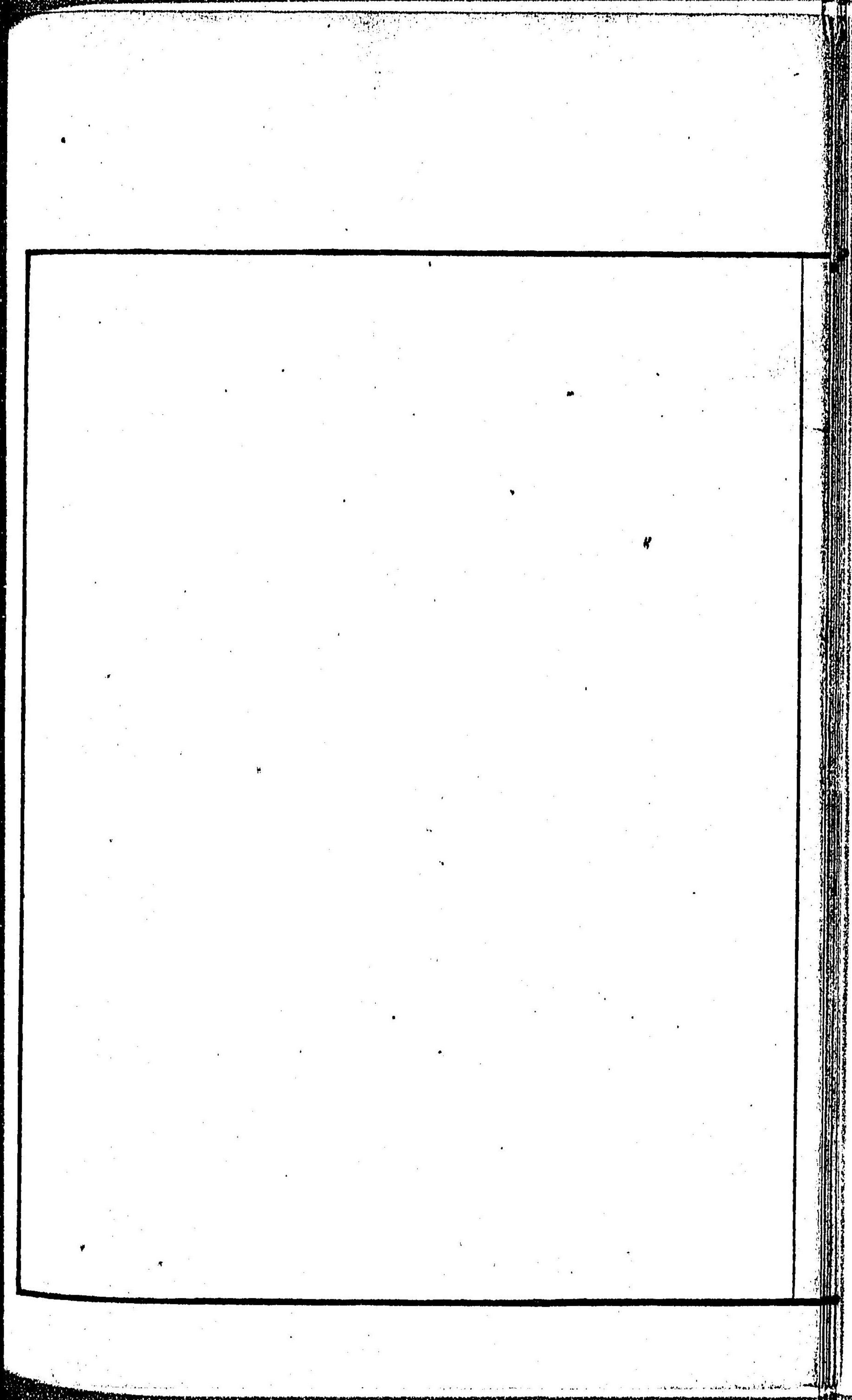
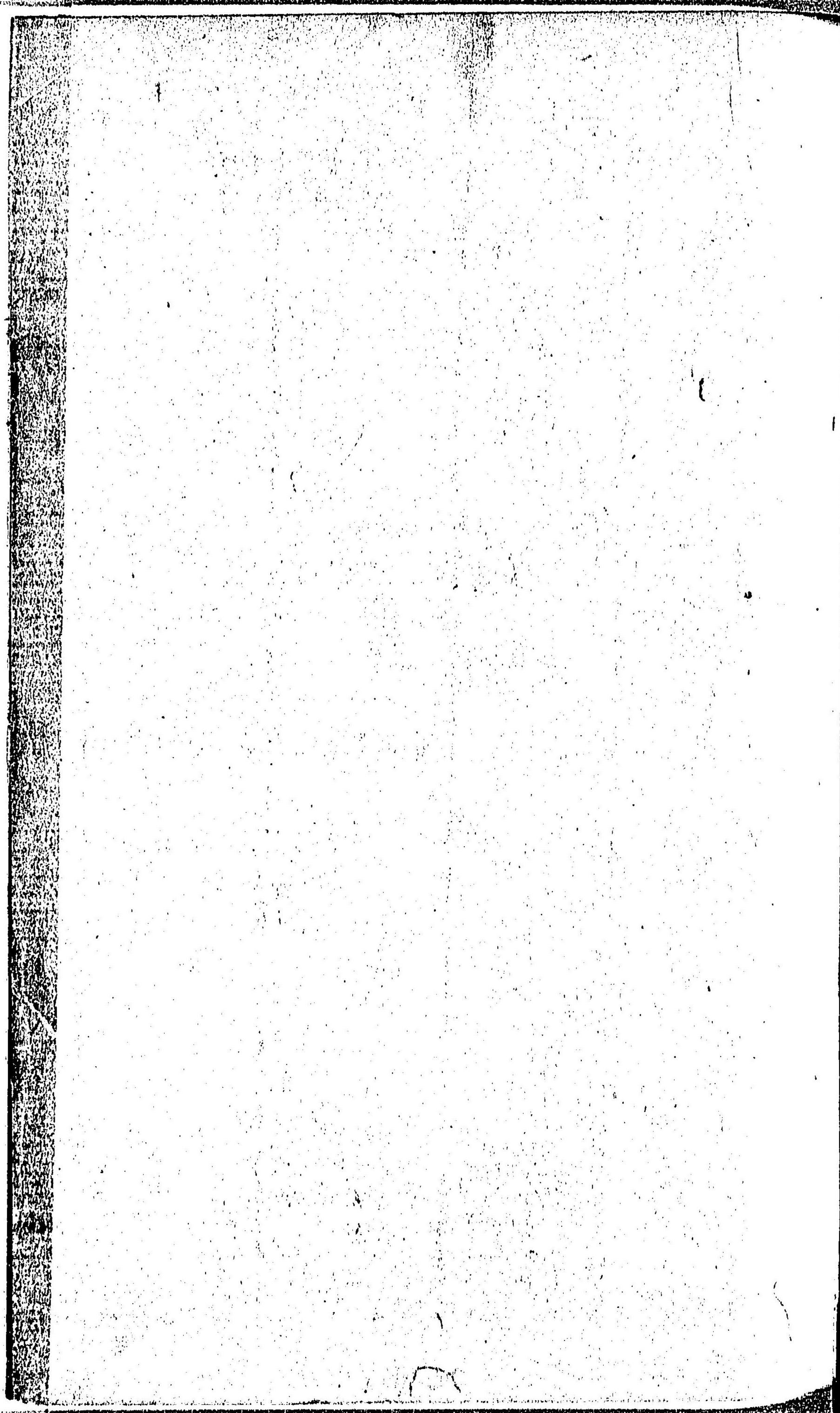
世までハ時々暴霧とち起て然る異変のある事也。神代有ける事の有る驗也。今傳へ示し賜ふ神の御心ぞ有べき薩摩、因人云、今も高千穂の山よ、晴か玄此稻とて、自然生出る稻ありて、能く寒れるとぞ。此を前よ、因人とり贈れ、ゆゑ今も藏りて、はて峯ふ立、加此御示有るお正、最奇聖ある事よこそ。は、長は八九尺許あてて、鍔ふや石や辨子難し。鋒の方は、横手あてて、十字此形の如し。又同じ状ある事、今一立、ゆゑ、近世よ、嶋津、義久、朝臣此、新ふ造て、建添られしと、も、はとは鹿兒嶋の商人、池田某と云し者、此山此神を、淡く仰交奉れるが、眞鍮を以て造て、建ある也。云は、孰れり實あらむ。今云、此山の事、まご其矛のあと、人く此る物あり、其を思ふ旨、あれば、此は、ちて、白杵郡ある高千穂、よ著さ、其書よ就て見るべし。

山も、諸縣郡あ、霧嶋山も、共よ古書ふも見也。現よ凡れら、げる處、れるを、皇御孫、命の天降、坐し御迹也。何あらむ、混冠也。其故也、ま、抄書紀、此高千穂と、穂日、二上とを、日、二上は、霧嶋山を、ゆるとき、二処共よ、其御迹ありと、云べ、れど、風土記よ、白杵郡あるを、高千穂、二上、峯を有、れ、二上も、白杵郡、ある方、を聞え、このを、ま、と書紀よ、た、襲之、高千穂、峯と、ある、襲ハ、大隅、あ、地、名、れ、ま、と、風土記、高、千穂、と、云、も、霧、島、山、の、方、と、こ、そ、聞、ゆ、れ、ま、と、風、土、記、の、現、稲、穂、の、古、事、も、白、杵、郡、あ、は、方、よ、記、せ、ま、と、是、と、今、の、現、よ、霧、島、山、よ、存、れ、ゆ、ま、と、神、代、の、地、名、多、く、大、隅、薩、摩、よ、り、彼、此、を、以、て、思、予、た、霧、島、山、も、必、安、神、代、の、御、迹、と、聞、え、ま、と、白、杵、郡、あ、る、も、古、書、ど、も、見、ゆ、て、今、も、正、しく、高、千、穂、と、云、て、ま、が、ひ、無、く、信、小、直、れ、ら、ざ、る、地、と、聞、ゆ、れ、た、か、よ、か、く、お、何、ま、其、と、一、此、よ、依、て、熟、く、思、ふ、了、神、代、の、御、方、お、定、免、難、く、れ、む、典、了、高、千、穂、峯、と、あ、は、れ、二、處、ふ、ち、同、名、ふ、て、加、此、白、杵、郡

おほもほと霧島山も共よ其山あるはし。其を皇御孫命
初免て天降坐し時。まば二此内の。一方は高千穂峯。ふ下
著賜ひて。其とて今一方の高千穂。ふ移幸とぬるはし。其
次序ハ。何う先。何う後。ふむ。知はきよ非ざまども終
ふ笠沙御崎。ふ留賜。ふゆし。路次。を以て思。ふ初。よ先降
著賜ひしは。曰。杵郡ある高千穂山。よある。其とて霧島山。ふ
遷。て坐けむ。斯れを神代の高千穂と云し山を。此二處。ふ
ゆら。を。此も彼も同名。ふ。し。から。古よ。て混ひて。一此
山のおと語。て傳。て來て。記紀。をも。ふ。然記。は。ま。む。備志
二
処共。同名。ふ。し。も。負。と。ゆ。し。
を。所以。に。て。ける。事。ぬ。る。べ。し。と言れある考。ふ。依。て。既

而と云をゆ末此文を作せ也。

○鍬胤云。おれの七七此巻を。板木と志て。世小弘むる者
は。信濃。國伊那郡山本村。ふ。酒井居平。美濃。國高須。藩士。
吉田方重。三河。國八名郡小川。里ある里長。菅沼定春。同定
敬。ま。美濃。國苗木。藩士。佐藤正幹。ら。ふ。



195
34
111

